

古丁における翻訳

——その思想的変遷をさぐる

はじめに

「満洲国」の文化や文学について数多くの学者が様々な視点から研究に取り組んできたが、資料収集の困難などが原因で、「満洲国」文学、とりわけ「満人」⁽¹⁾文学の研究はまだ資料紹介のレベルに止まっている。文学作品の翻訳についても、これまでふれられてはきたが、テキストに立ち入っての詳細な検討を行ったものは、まだ見あたらない。「満洲国」という特別な歴史空間の中で、翻訳は特別な意味を持ったはずであり、その検証を通して、翻訳自体の意義を超えて「満洲国」の植民地文化政策に対する「満人」のリアクションが見えてくると考えられる。ゆえに、本論文は「満洲国」の「満人」⁽³⁾作家の代表と見なされていた古丁（一九一四—一九六四）の日本語作品の翻訳について、その動機、方法等を日本語原文と対照し

梅 定 娥

ながら考察する。それによって、「愛国抗日作家」とも、政治上「反動的な作家」とも評価されてきた古丁の思想の変遷を明らかにしたい。

本論に入る前に古丁の生い立ちについて簡単に紹介しておきたい。なぜなら、そこに彼の対日感情の土台が見えるからである。

古丁の父親は他の大多数の関内（山海関の南）からの移民と同じように山東省から長春に住居を移した。長春で商売をしてそこそこの金持ちになり、若い女性を買って後妻にして、五十歳の年に長男すなわち古丁を得る。

古丁の生まれた前の年、つまり一九一三年に長春駅が築かれ、その後、世界一速い特急列車アジア号が長春を走るようになる。当時の中国の東北地方では、最大の都市は遼寧省の奉天（現在の瀋陽市）で、二番目の都市は吉林省の中心都市吉林市であった。長春は吉林

省のごく普通の小さな町であるが、地方政府は満鉄の土地買いに抵抗した。しかし、満鉄は色々な方法を使って土地を買いもとめ、その附属地を近代的な町として建設する。関東軍に守られた満鉄の附属地は中国の中の日本国として、地元の法律等とは一切関係がない。そこで長春市は地元の住民が住む昔ながらの町と日本人が生活する近代的な附属地という対照的な二つのエリアを持つ町となった。

満鉄は附属地の中で中国人の子供向けの公学堂を開いた。地元の住民は自分の子供をそこに送りたいが、古丁も親に長春の満鉄附属地にある長春公学堂に送られていった。幼い古丁は大人たちの満鉄の土地買いに對する不満を聞きながら、毎日昔ながらの自宅のある町から公園、高級ホテルなどが揃った近代的な町に通い、その対照を毎日目にしたはずである。公学堂では近代的な教育を受け、日本語も覚えさせられ、卒業した。古丁は、続いて大都市の奉天にある南満中学堂に進学する。南満中学堂は、満鉄が満洲に設立した二つの中学校のうちの一つで、そこに入学できる学生は豊かな家庭経済と優秀な人材という条件を満たさなければならない。それゆえ、この制服を身に纏う学生は誇り高く、また憧れられる存在である。ここで古丁はさらに日本語を上達させ、夏目漱石（二八六七—一九一六）や石川啄木（一八八六—一九一三）を読み、日本文化や文学に親しんでいった。その時、彼は啄木の短歌の翻訳を試みたという。南満中学堂を卒業した古丁は、地元の東北大学教育系に入る。当時

の東北大学には中国共産党の地下組織があり、大学内で左翼思想の勉強会や活動が盛んに行われていた。古丁はその影響を受けたと考えられる。

一年後の一九三一年九月に満洲事変が起こり、奉天は関東軍に占領され、東北大学の学生は勉強の継続ができなくなり、学長の張学良の後について北平に亡命する。

東北地方が日本に占領されたことによって、中国全土で抗日救国運動の嵐が巻き起こる。故郷を追われて北平に亡命してきた東北大学の学生がその抗日運動の重要な力となる。大学を失った彼等は最初は、北京大学や清華大学等の聴講生になったりした。その中には改めて北平の大学に入学する人もいる。古丁（当時筆名突微）は、そのような学生の一人である。一九三三年九月古丁は改めて北京大学に入学し、一九三三年左翼作家聯盟北方部に加入する。⁽⁵⁾

以上が北京大学に入学するまでの古丁の簡単な経歴である。注目してもらいたいのは古丁の日本に対する感情である。すなわち、満鉄の学校で教育を受けた彼は、日本に対して親しみを持つ反面、関東軍の満洲占領によって反感も持った。このような愛と恨みの織り交ざった対日感情が「満洲国」での古丁の行動を貫くことになる。

古丁は日本語作品の翻訳を生涯行っていた。時期によってその翻訳は北平左翼作家聯盟時代、「満洲国」時代、中華人民共和国時代という三つの段階に分けて考えることが出来る（次頁の表参照）。本

論文は主に「満洲国」時代の古丁の翻訳を対象とする。「満洲国」以前のものにはふれるものの、「満洲国」以後のものは省くことにする。また、「満洲国」での翻訳は、全体的に見れば左翼傾向的なもの、いわゆる純文学的なもの、時局的なもの、という三つに分類することができる。それに応じて、「満洲国」での古丁の翻訳を第一段階（一九三七年）、第二段階（一九三八年～一九四一年）、第三段階（一九四二年～一九四五年）という三つの段階に分けて、それぞれ考察する。

一 北平時代の翻訳

中国の左翼作家聯盟は、ソ連のラップ（ロシア・プロレタリア作家聯盟）と日本のナップ（全日本無産者芸術連盟）の影響を受け、一九二五年に成立した革命文学国際局（国際革命作家聯盟）の支部として一九三〇年三月二日に上海で成立した。その中に中国共産党の「党団」が設置され、その外部組織として、共産党の革命活動に呼応して活動するものである。沈端先（一九〇〇—一九九五）、魯迅（一八八一—一九三六）などがその常務委員に選ばれる。一九三〇年九月、中国左翼作家聯盟北方部が北平大学で成立した。一九三三年六月に、北方部の常務委員の改選により、加入して間もない古丁は組織部長に選ばれ、北方部の機関誌の編輯などにかかわりながら翻訳や創作に従事する。この時期、古丁は朴能著「味方——民族主義

を蹴る——」、岩藤雪夫著「紙幣乾燥室の女工」、古川荘一郎著「芸術理論に於けるレーニン主義のための闘争——忽卒な覚え書——」を翻訳した。次はそれらについて検討する。

1 「味方——民族主義を蹴る——」

一九三三年五月に古丁は日本の『プロレタリア文学』一九三二年九月号に発表された在日朝鮮人作家朴能著「味方——民族主義を蹴る——」を翻訳して北方部の機関誌の一つ『文学雑誌』第二号（一九三三年五月）に発表した。土地を取り上げられ、日本に流れ込んだ朝鮮農民朴成文が、高槻の山元農場に来て、安い賃金で雇われ、地主が小作から取り上げた水田を耕す。しかし、間もなく彼は手当てなしに解雇される。地主は耕鋤機を導入するために約束を破ったのである。成文は、「生まれおちてから、至る所で、日本人から受けた、侮辱、迫圧が、日本に来てからいっそう強く感じるようになった」彼は「すべての日本人を憎んだ。軍人や官吏は直接の抑圧者、雇主は直接の搾取者、労働者は直接の競争者として、みんなじぶんらを虐める敵だ」と思っている。怒りをぶつけるところがなくて、成文は途方に暮れる。そこへ日本人の農民組合員が訪ねてくる。彼らは、

「俺らには、日本人朝鮮人の区別がねえ。あるのは、労働者と

表
古丁の翻訳作品

時期	北平時代																			「満洲国」時代										中華人民共和國時代																																																																																																																																																																																																																																																																																																																								
タイトル／原題	「你们不是日本人、是兄弟！」／「味方」																			「新詩歌作法」										「新興文芸の新体制」										「纸币干燥部の女工／紙幣乾燥室の女工」										「在艺术理论中的列宁主义的斗争／芸術理論に於けるレーニン主義のための闘争」										『現代日本文学史略』										『宮本武藏』（水の巻・優曇華）（一〜四）										「歼灭而已」「殲滅せんのみ」										『米英侵略东亚史』／『米英東亜侵略史』										『学生与社会』／『学窓と社会』										「堂倌再来一杯」／「ボーイ、ビールをもう一杯」										「梦谈」／「夢がたり」										『阿忒萊・蒲灵蒲』／「アッタレーア・プリンケプス」										『井原西鶴』／「井原西鶴」										『心』／「心」										「一夜」／「一夜」										「狂人日记」／「狂人日記」										『悲哀的玩具』／「悲しき玩具」										『鲁迅著書解題』／「鲁迅著書解題」										『箱根风云录』／『箱根風雲録』										『生活在海上的人们』／「海に生くる人々」																																																																																																																																				
原作者	朴能																			森山啓																			岩藤雪夫																			古川莊一郎																			片岡良一																			吉川英治																			高村光太郎																			大川周明																			中島健蔵																			モーパッサン																			ガルシン																			武者小路実篤																			夏目漱石																			ゴブリ																			石川啄木																			増田渉・胡風等																			楠田清																			葉山嘉樹																		
収録誌／出版社	『文学雑誌』第二号 西北書局																			『文芸雑誌』第三・四号合併号 西北書局																			『水流』第二卷第一期 北平水流社																			『芸文志』第十号																			『芸文志』第七号																			芸文書房																			芸文書房																			『訳叢』 芸文書房																			『芸文志』第三号																			満日文化協会																			『芸文志』第一号																			『明明』第二卷第四期																			『明明』第二卷第三期																			『明明』 鲁迅記念特集																			中央電影局東北電影撮製片 廠																			上海訳文出版社																																																								
刊行年月	一九三三・五																			一九三三・七																			一九三三・七																			一九四四・八																			一九四四・五																			一九四二・四																			一九四一・十二																			一九四一・十																			一九四〇・六																			一九三九・十																			一九三九・六																			一九三八・一																			一九三七・十二																			一九三七・十一																			一九五四																			一九七九																																																								
備考	実物は確認されていない																			実物は確認されていない																			実物は確認されていない																			『奏凱歌而後已』特輯																			日本語からの重訳																			後『訳叢』に収録																			映画台本																																																																																																																																																																																																																																			

資本家、貧農と地主だ。ところで、あんたらにも俺らにも共同の敵は山元の野郎だ……」「俺ら貧農とお前さんらとは、言わば、兄弟分だからな……」⁽⁶⁾

と話して聞かせる。成文は、その言葉に感激し、

「兄弟!?……」成文は、邪魔立をする民族主義をぐつと抑えて叫んだ「お前さんら、日本人じゃねえ。兄弟だ……」⁽⁷⁾

以上が、この小説の大体の内容である。中国語の翻訳文の末尾に「一九三二年『普羅文学』九月号」とあるが、日本の『プロレタリア文学』九月号の「原稿募集」に「八月号に発表された銘君の『万歳』も本号にのせられた朴君の『味方』も、共に文新宛に送られた投稿の中から選ばれた作品である」⁽⁸⁾と書いてある。つまり、作者の朴能は日本文壇で知られる作家ではなかった。

このような無名の作家の作品を、なぜ古丁は選んで翻訳したのか。理由は民族を超えてプロレタリア階級の連帯を訴えるという小説のモチーフにあると思われる。中国左翼作家聯盟はそもそも国際革命作家聯盟の支部として作られたものであり、当然のこととして国際無産者連帯の考え方に立つ。例えば、『文学雑誌』の創刊号（一九三三年四月）に、建地著の脚本『命令…退却！第二道防線！』が掲

載されている。

舞台は上海戦争を背景に、国民党十九路軍の「傷兵病院」と日本軍の捕虜を收容する「戦時捕虜拘留所」の間のところに設定されている。「日本鬼子」と、上海抗日戦を支持しない南京政府を恨む二人の傷兵が、上海駐在の日本軍の反乱について話す。そこへ、日本兵捕虜の谷黒が語る。日本兵が日本軍閥に騙されて中国に来てしまったことを悟り、反乱したのだ、とその経緯を語る。そして、傷兵も日本軍捕虜も「日本帝国主義を打倒する!」「中日兵士連合せよ!」等のスローガンを叫ぶようになる。また、赤軍の捕虜となった経験を持つ傷兵の口を借りて、共産党の赤軍の親切さが語られる。傷兵たちは、南京国民党政府の退却命令を拒否して自ら抵抗する、というところで幕が下ろされる。

以上のように、この脚本には二つのモチーフがある。一つは、反帝国主義侵略戦争である。この場合は兵士が誤解をなくし、国境を越えて連合する必要がある。もう一つは共産党擁護である。この二つのモチーフはつまり中国左翼作家聯盟北方部の機関誌『文学雑誌』のモチーフである。

「你们不是日本人、是兄弟!」を掲載した『文学雑誌』第二号の「編後」は、この小説について以下のように述べている。

『你们不是日本人、是兄弟!』は朝鮮人の作品である。被压迫

朝鮮人の文学は、あまり中国に紹介されていない。しかも、これは狭隘な民族主義を力強く批判した作品である。(『你们不是日本人、是兄弟！』系朝鮮人の作品。被压迫的朝鮮人の文学、介绍到中国来的很少、而这篇又是有力的批判了狭义的、民族主义。)⁽⁹⁾

と高く評価している。すなわち、この翻訳作品が採用された理由は、朝鮮人文学紹介と狭隘な民族主義の批判にある。古丁は国際プロレタリア革命の思想に呼応してこの作品を翻訳したのである。

他方、翻訳者の古丁は小説の主人公の朴成文と相似した経歴を持つことも見逃せない。日本の占領によって大学を失い、故郷を追われたこと。更に一九三二年故郷は「満洲国」に変わり、「外国」となってしまったこと。亡命者の古丁は、土地を取り上げられ、朝鮮半島を追われた朴成文と同病相憐れむ関係であろう。そして、彼らの共通した敵は日本帝国主義であり、日本の無産者階級ではない。日本の無産者階級はむしろ兄弟である。古丁の狭隘な民族主義を蹴飛ばす精神には、長春公学堂と南満中学堂で培われた日本への親しみがあつたとも考えられる。

言い換えれば、古丁は、日本帝国主義の侵略に反対すると同時に、日本に親しみを持つ。その「親日」の感情を基礎に日本の無産階級の連帯感情が受け入れやすくなる、と考えられる。

その翻訳の方法は基本的に直訳であるが、そのタイトルの翻訳には違う工夫も見られる。「味方——民族主義を蹴る——」のほうが抽象的で理論っぽい。それに比べて、朴成文の感激した一言「你们不是日本人、是兄弟！」を抜き出して題名にしたほうが、感情が強く出されており、生き生きとして説得力がある。

2 「紙幣乾燥室の女工」

これも『文学雑誌』(第三・四号合併号 一九三三年七月)に発表されたものである。岩藤雪夫(一九〇二—一九八九)の原文は一九三二年五月号の『改造』に発表されていた。

女工お道が組合員になる経緯を語る小説である。お道は父親治平と母親の美津とともに内閣印刷局で働いている。治平が鉄や印刷器のローラーを洗う苛性ソーダの池に落ち、煮魚のような死を遂げた後、紙幣乾燥室で働く美津は肺病で倒れ、同じ紙幣乾燥室に勤めるお道も血を吐くようになる。お道は母親の医療費と薬代などのために、紙幣を盗んだことを、紙幣乾燥室長の宮本に気づかれる。宮本が彼女をエサにしようとした時、お道は怒り出し、組合員の庄司らに従ってメーデーのデモ隊に加わる。

資産階級に搾取、圧迫され、労働者は死んだり、病気になるってか
ら首になったりする運命を辿らなければならない。その運命を逃れ
ようとするれば労働組合に入るしかないというモチーフが表現されて

いる。

この小説は、どうして翻訳されたのか。まず、その時の社会背景を見てみる。一九二九年十月、ニューヨーク株式市場の暴落に始まった世界恐慌の影響が中国駐在外国企業及び中国民族企業に及び、生糸、紡績、マッチ、タバコ等の工場が相次いで休業するようになる。おびただしい数の女工が給料を得られず、生活が継続できなくなる。そこで、左翼作家聯盟北方部の上級機関の中国共産党河北省委が、各工場で女工の闘争を組織する。したがって工場が集中した天津では女工闘争が盛んになる。その中には天津恒源紗廠の労働者の休業に反対する闘争が勝利を収めた。

このような情勢の中で、共産党の外部組織に当たる左翼作家聯盟には、女工闘争に呼応した行動が求められる。左翼作家聯盟北方部の組織部長として古丁はもちろんその方針に従って積極的に行動する。彼は、「紙幣乾燥室の女工」を翻訳すると同時に、左翼作家聯盟北方部の関係雑誌『氷流』の第二巻第一期（北平氷流社 一九三三年七月）に「貴重な経験——天津恒源紗廠労働者の闘争（宝貴的経験——天津恒源紗廠工人的闘争）」という詩を発表した。それは天津恒源紗廠女工の反休業闘争の勝利を謳い、闘争経験をまとめた作品である。「紙幣乾燥室の女工」は、中国女工の闘いを応援するために翻訳されたと思われる。では、徐突微は如何にこの作品を翻訳したのか。テキストに立ち入って検討する。

岩藤雪夫の原作には伏字の「×」が多いが、中国語の翻訳文では「×」がほとんど消えている。日本プロレタリア文学では、政府の厳しい検閲を逃れるために、出版社が引っかけりそうなることをあらかじめ「×」等の符号で隠したりする。これが伏せ字である。日本の読者は日本社会の状況を知っているから、上下のコンテキストから伏せ字のかんりの部分を解説することができて小説内容の理解には、それほど支障はないらしい。しかし、日本のプロレタリア運動にまったく知識のない中国の普通の読者にとっては、「×」は謎にしか見えない。そのため、中国語翻訳文に伏せ字が出せないのは当然のことである。ただ、その伏せ字の部分が翻訳者に正しく解説されたかどうかは問題となる。

「紙幣乾燥室の女工」は、一九八五年十一月『日本プロレタリア文学集・十「文藝戦線」作家集・（二）』に収録される際、「著者による伏字復元が行なわれた」^⑩。古丁の翻訳とそれを比べて、満鉄の学校教育を受けて日本文学に詳しいと思われる若き古丁の日本プロレタリア文学の解説能力を検討する。以下の例は、原文の後ろの括弧の中に岩藤が書き直したことばである。

- ① 『文句いわずに辛抱しろい、へこたれて××ができるかい、』

（革命）

「别说闲话、忍耐着吧！先畏缩下去、能革命么？」

② 幾百人の労働者が××きただらうか。(倒れて)
不知道要累死了几百个劳动者。

③ 母親の美津もそうだった。父親と一緒に四年つとめて××つちまったのだ。(首にな)

「母亲的美津、也是这种办法。和父亲一起做了四年工、就长别了。」

④ 「あれで、労働者を××通せたら、お目にかからねえや……」
(騙し)

「好容易把工人凑到一块、人家上司也瞧不见、白打功……」

⑤ 「×××××ツて私は好きで×××××生れたんじゃありません、生れて見たら××だったんです……」(印刷局女工 女工に女工)

「印刷局女工什么咧、我并不是得意当女工才生为女工、生下来的时候、是人啊……」

⑥ 「(省略) 毎朝ああして×××の銅像の前まで行って×××××くるんです……」(楠正成 忠君愛国を誓って)

「每天早晨那么样到×××的銅像前面、行个礼回来。」

⑦ 「オイ、又きてるぜ、門前の××、門内の白色倫理だ。」(私服)

「喂、又来了。门前的守卫、门内的白色伦理教程！」

⑧ 「種はつきねえ×××××……無理もないさ。この印刷局

は×××時代は全組織オイクルに近かったんだからな」(*****
労農党)

「操心？那也真不怪他！因为这个印刷局在×××时代、工人全都是组织里的。」

⑨ 「へッ、××××××××××××、よしみんな歩けッ！」(私服のやつらに体当りだ)

「嘿、他敢捕吗？他妈的要捕一块去！」⁽¹¹⁾

以上の例を全体的に見れば、「×」はたいい文字に直されたが、そのまま残されたものもある。残されたのは、固有名詞である。徐突微は、具体的な内容を知らないが、固有名詞であることが分かって、そのままにしたと思われる。

「×」を文字に書き換えた場合については、合っているものと合っていないものがある。合っている場合、二つのパターンがある。

例①は原文と全く合致している。「革命」思想に燃えた徐突微はこのことばを間違えることがないだろう。例②「累死」は「疲れきって死ぬ」の意味で、「倒れる」の意味とびつたりするわけではないが、意味は通じる。

正しくない場合はいくつものパターンに分かれる。例③「長別」(長く別れる、つまり死別)は母親と父親の間のこととなるが、「首になる」は母親と工場側の問題である。このずれは文脈の読み間違

いとことばの問題と考えられる。例④の「好容易把工人凑到一块」(やっと労働者に集まってもらった)と「労働者を騙し通せたら」は意味が全然違う。これは前後のコンテキストからは読み取りにくいので、古丁は自分の理解で適当に当てたと思われる。例⑤の「印刷局女工」と「女工」はあっているが、最後の「人」は「女工」とずれている。お道は女工という呼び方に反感を持つ。安い賃金で働き、肺病に罹って、首になったら売春婦になる、という女工の運命に抵抗していると思われる。「女工」を「人(人間)」に書き換えると、「女工」は「人間」と対立概念となり、非人間的なものとなる。それによって、原文のお道の言いたいことがいつそうはつきりさせられ、ブルジョワとプロレタリアとの圧迫と被圧迫、搾取と被搾取の矛盾がもつとはつきりと読み取れる。例⑥の「行个礼回来」(礼をしてから帰る)と「忠君愛国を誓って」とは意味の重さが違う。「忠君愛国を誓う」は、修養団の「修養」の内容で、プロレタリア階級思想と正反対のものである。この一言で工場側の勧めた修養団と労働組合の鋭い対立が分かる。「礼をしてから帰る」としてしまつては、労働者運動を厳しく取り締まる社会背景がそれほど明確にならないし、お道の修養団から組合へと転向することの正しさと難しさが弱くなる。従つて、小説の説得力も弱くなる。このずれの生まれた原因は、翻訳者が日本プロレタリア運動に対抗した勢力と思想に関する知識が乏しいし、それについて調査も行っていなかったこと

であると思われる。例⑦「守卫」は一つの会社や建物の安全と秩序のため警備する役目を果たす人であるが、「私服」は特別高等警察で専門に思想犯を取りしまる国家暴力機関である。この二つの性質はまったく違う。

このずれの原因としては、古丁が日本プロレタリア運動に関する情報によく通じていない、特に特別高等警察が工場の労働組合運動まで見張ることを認識していなかったことが考えられる。実は一九三二年二月、小林多喜二(一九〇三—一九三三)が特別高等警察によつて虐殺された事件は、中国左翼作家の間で大きな反響を呼び起こしていた。中国左翼作家聯盟北方部の機関誌『文学雑誌』創刊号(一九三三年四月)に張露薇(生没年不明)著「小林多喜二哀辞」、第二号に郁達夫(一八九六—一九四五)、魯迅等を發起人とする「急逝した小林遺族のための募金啓(為横死小林遺族募捐啓)」⁽¹²⁾が掲載されている。古丁は特高の存在は知っていたはずだが、こうした場面にまで登場するとは思わなかったであろう。

⑧の「労農党」は固有名詞で翻訳文に×××のままに残されている。これも歴史知識の欠乏からと思われる。ここの「労農党」はおそらく一九二九年十一月に結党した大山郁夫(一八八〇—一九五五)を委員長とする左翼合法政党的ことであろう。合法であるから労働者が堂々と組織に入ることができる。例⑨の「私服のやつらに体当たりだ」を「他敢捕吗?」にするのは、完全に文脈から読み取り間違

いと考えられる。ここで面白いのは、原文にない「他妈的」という内容が加えられたことである。「他妈的」は怒りを表す時使われるぞんざいなことばで、労働者等下層社会の人がよく口にする。このことばが加わることによって日本の労働者の会話が中国の労働者の会話に変わった。実は、主人公の名前お道も「欧弥琪」(ou mi ci)と音訳されて中国人っぽい名前になっている。

以上の検討を通して、「紙幣乾燥室の女工」における古丁の翻訳は①中国無産者階級革命の情勢に呼応してテキストを選んだ。②日本プロレタリア運動の歴史に關係する知識に詳しくなく、翻訳のための調査がきちんと行われなかった。③古丁は左翼青年で、革命の熱意に溢れているが、革命に対する弾圧の厳しさを十分認識していない、等三点の特徴があることがわかる。①②は、その翻訳の目的が、日本プロレタリア文学を正確に紹介することではないので、原文の背景についての調査はそれほど重要ではない、それより、中国労働者の革命闘争を応援するためのもので、中国風にアレンジすることにも必要、と判断されたのかもしれない。③については革命運動が実際にこうむる弾圧の強さを認識していないから、そのための心構えも出来ない、従って、いざ逮捕されたら転向か変節する可能性が高くなる、と考えられる。これは後の古丁の逮捕と変節に繋がるかもしれない。もちろん、これは、古丁一人だけの問題ではなく、当時の左翼青年の通弊であったといえる。

3 「芸術理論に於けるレーニン主義のための闘争——忽卒な覚え書——」

これは左翼作家聯盟北方部の關係雜誌『水流』第二卷第一期(北平水流社 一九三三年七月)に發表された。その原文、「芸術理論に於けるレーニン主義のための闘争——忽卒な覚え書——」は、蔵原惟人(一九〇二—一九九二)が古川莊一郎のペンネームで、一九三一年十月に書き、一九三一年十一月号『ナップ』に發表されていた。蔵原自身が以前に書いた理論を批判したもので、その主な内容は、ソビエト共産党第十六回大会、コミンテルン執行委員会第十一回總會などの開催により、ブハーリン(二八八八—一九三八)の日和見主義的理論の基礎となった機械論、デボーリン(生没年不明)一派の觀念論の弱点の徹底的な暴露、哲学におけるレーニンの段階に達した意義の闡明である。また、ブレハーノフ(二八五六—一九一八)、ブハーリン、デボーリンに影響された日本のプロレタリア芸術理論を「新しい段階の見地から、即ち國際的・国内的プロレタリア運動の実践に於ける新しい段階の見地から、そして、また哲学に於けるレーニンの段階の見地から」批判し、止揚する。批判された蔵原の以前に書いた理論は、主に芸術と政治の關係、プロレタリア・リアリズムの問題、芸術に於ける形式と內容の關係など六点に及ぶ。その批判の目的は、日本プロレタリア芸術の理論をレーニン

的哲学段階に方向転換させることである。

翻訳の最後に「訳者附識」が付けてあるが、中には主に二つの問題が指摘されている。一つは、ソ連文学はもうすでにレーニン段階に入っている。日本も古川莊一郎のこの文章によってレーニン段階に達した。しかし、中国ではまだレーニン段階に達していない、と。

中国左翼作家聯盟はその課題の一つとして、マルクス主義の芸術理論及び批評理論を確立しようとしている。そのために、先ずソ連と日本の文芸理論を翻訳紹介する必要がある。ソ連のものはロシア語から直接翻訳されるものもあれば（例、瞿秋白（一八九九—一九三五）訳「唯物史観的芸術論」等）、日本語経由の重訳もある（例、魯迅、馮雪峰（一九〇三—一九七六）等の翻訳）。日本の場合は、青野季吉（一八九〇—一九六二）、宮本顕治（一九〇八—二〇〇七）、森山啓（一九〇四—一九九二）、本庄陸男（一九〇五—一九三九）の評論文が翻訳された。一九三二年十二月三十日、コップ（日本プロレタリア文化連盟）の成立後、中国左翼作家聯盟メンバー、日本亡命中の聶紺弩（一九〇三—一九八六）が、上田進（一九〇七—一九四七）の論文「ソ連文壇最近的理論闘争」⁽¹³⁾を翻訳して、ソ連文壇の最新情報を紹介した。また、同じく聶紺弩が、蔵原惟人著「芸術の内容と形式」も翻訳紹介した。古丁のこの論文の翻訳は、それに続いて行われたもので、当時日本プロレタリア文学理論の発展段階についての最先端の論文と思われる。聶紺弩は亡命で日本在住であるが、古丁は北平に

いる亡命学生に過ぎない。古丁の日本プロレタリア文壇の新動向に対するすばやい反応がうかがわれる。

「訳者附識」に指摘された二つ目の問題は、批判行為は自分自身にまで及ばなければならない、ということである。

中国左翼作家聯盟の成立前、創造社、太陽社のメンバーと魯迅、茅盾（一八九六—一九八二）等の間で展開された「革命文学」に関する論争が長く続いていた。創造社のメンバー、特に後期創造社の李初梨（一九〇〇—一九九四）らは福本イズムから強い影響を受けたと言われる。古丁は左聯メンバーの思想傾向を把握し、それを念頭に入れながら二つ目の問題を提出したと考えられる。一学生に過ぎない古丁であるが、中国左翼革命文学理論を発展させる責務を担おうとしている。この態度は、その加入してからすぐに北方部の組織部長に選ばれる大きな理由の一つとなったであろう。

次に、この論文における古丁の翻訳について詳しく検討する。

中国左翼作家聯盟メンバーの翻訳には原文に忠実な直訳が多い。その理由としては、①直訳がいちばん簡単な方法で取りやすい。翻訳者には青年学生が多くて、知識の蓄積等の限界もある。②魯迅が直訳を提唱していた。この点について、夏目漱石著『こころ』の翻訳を分析する時詳しく論じる。③直訳した文章には原文の風格がより多く保たれ、外国ものらしい、近代的なものらしい趣がある、と三つ考えられる。直訳の短所は翻訳文が難解になることである。会

話文など短い文章が多い小説の場合は、直訳のマイナスの一面がそれほど感じられないが、論文の場合、特に長文が多い場合は、その弊害が隠せない。次に例を示しながら古丁の翻訳を分析する。

① 日本に於ける芸術理論は、これまで知らず識らずの間にプレハ
ーノフ、ブハーリン、デボーリンのメンシエヴィキ的、右翼
日和見主義的理論＋弁証法的唯物論の単なるカリカチュアーに
過ぎない。福本の極左日和見主義的理論の影響を蒙つて来た。

在日本的艺术理论、到现在、不知不觉的蒙受了浦列哈诺夫、布
哈林、德波林的门塞维克、不过是右倾机会主义底理论＋辩证
法底唯物论的单纯的漫画（Caricature）的宗派的极左机会主义
底理论的影响。

原文は、主語が「日本芸術理論」、述語が「蒙つてきた」、目的語
が「〴〵の影響」である。翻訳の文章は主語、述語、目的語が原文と
一致しており、この点は問題がないが、述語と目的語の間の距離、
つまり目的語の修飾語が長すぎて、文章が分かりにくい。二つか三
つの文章にしたほうが分かりやすくなる。

しかし、これほどの直訳なのに、なぜか落とされたことばがある。
それは「福本」という二つの字である。原文の「福本の極左日和見
主義的理論」は福本イズムに限っているが、「极左机会主义」とな

ると、その指す範囲が広くなる。前に触れたように、当時中国では
李初梨らのような福本イズムから影響を受けた「极左机会主义」も
あれば、共産党内部で李立三（一八九九—一九六七）のように直接
ソ連の影響を受けた「极左机会主义」もあった。このような現状に
対応して、古丁は、対象の特定を避け、多くの人に自己批判をして
もらおうと、「福本」の二字を落とした、という可能性が考えられ
る。

② この問題と関連して、文学（芸術）の党派性的問題（レーニン
『文学は×のものとならなければならない』が立っている。

和这问题关联着、有文学（艺术）的党派性的问题在站着、（列
宁：“文学必须成办党的东西”）

中国語では「站着」は「立っている」という意味ではあるが、
「遮るものをクリアするため」というニュアンスがない。ゆえに、
「問題在站着」（問題が立っている）との意味は不明瞭である。よく
意味を考えずに逐語訳的に翻訳する態度といえる。

③ 『我々は内容は卒業したから形式に努力しなければならない』
というような言葉は完全に意味を為さないのである。

（省略）这类话、是不够意思的。

「意味を為さないのである」とは、「意味がない」「無意味」を意味するが、「不够意思的」のいちばん単純な意味でも「意思が足りない」で、これは正確ではない。

④ また芸術作品を唯単に特定の階級的イデオロギーの反映であるというだけでも不十分である。

还有、只说艺术作品是简单的特定的阶级底意德沃洛基（观念形态）的反映也是不充分的。

訳文に、「的」「底」＝「的」が四つも連用されている。中国語文としてはくどくて洗練されていない。もとの日本語の文章も翻訳体のそれであり、当時の左翼的な風潮に満ちたもので、当時の日本の左翼理論の雰囲気古丁に伝染しているのかもしれない。

⑤ この批判＝発展は、唯最近に於ける国際的及び国内的なプロレタリア運動の実践の観点から、そしてまた哲学のレーニンの段階の観点からのみ為し得るのであって、それは決して、これらの理論によってさへ克服された一切のブルジョア的、社会民主主義的『芸術理論』（日本に於ては平林イズム、青野イズム等々）の復活をゆるすものでないばかりか、反つてそれに最後

のとどめを刺すものである、ということだ。

这批判—发展、祇从最近的国际底及国内底的普洛列塔利亚运动的实践的观点、而且、还祇从哲学的列宁底阶段的观点、才能做到…那决不允许祇要是被这些理论克服就算完事的一切布尔乔亚底、社会民主主义底「艺术理论」（在日本是平林²⁵青野²⁶ism.）的复活、不仅如此、反而、要给它一个最后的致命的制止²⁷。

翻訳文の傍線部は目的語「復活」の限定語としては長すぎる。しかもこの限定語の中にはさらに限定と被限定語が含まれている。ますます複雑になる。

古丁は、中国左翼文学理論をレーニン段階に突入させ、またその突入させる際に自己批判の必要性等を、古川莊一郎著「芸術理論に於けるレーニン主義のための闘争——忽卒な覚え書——」の翻訳を通して伝えようとしている。その翻訳の方法は直訳を取っているもので、翻訳文の中に文法に合わない言葉の使い方や機械的な逐語訳が見られる。一方、中国の現実にあわせるために、原文を書き換えたりにしている。

北平時代の古丁は、「味方——民族主義を蹴る——」と「紙幣乾燥室の女工」と「芸術理論に於けるレーニン主義のための闘争——忽卒な覚え書——」を翻訳した。それぞれのモチーフはプロレタリア

ア国際連帯の提唱、労働者の闘い、革命文芸理論の建設で、この時期の翻訳は革命のための翻訳ともいえる。これらの作品の翻訳は、中国左翼作家聯盟の活動として行われ、その主な目的は共産党指導下にある革命運動への呼応と応援である。そのため、そのテキストの選択も翻訳もこの目的を中心に行われたことがはっきりしている。中国女工の闘いの参考にするために文戦派、岩藤雪夫の小説を翻訳しながら、中国革命文芸理論の発展を促そうとして戦旗派の蔵原惟人の論文を翻訳した。つまり、日本における党派的な対立は無視していることになる。

翻訳の方法は基本的に素朴な直訳を取っているが、中国の革命運動の現状に合わせて、テキストの内容を多少書き換えることも見られる。その翻訳のやり方から、プロレタリア革命に燃えて、中国革命、とりわけ革命文芸理論建設のために努力する古丁像が見られる。なお、この時期の翻訳からは、古丁は満鉄の小学校・中学校教育を受けたものの、日本左翼文学運動の歴史や弾圧の厳しき、徹底ぶりには十分な知識を持っていないように思われる。

二 「満洲国」時代の翻訳

一九三三年八月ごろ、中国左翼作家聯盟北方部組織部長、古丁は逮捕され、北平の中山公園で他の人といっしょに共産党を攻撃する記者会見をした。その様子が新聞で報道された。その後、古丁は故

郷の長春に戻る。「満洲国」の首都になった長春、今の新京には、新しい建物がどんどん建てられ、街中に建設ムードが漂っている。町の権力者の座に日本人が座っており、辛亥革命によって倒された清の廃帝溥儀が「満洲国」の執政となっている。新文化運動の中で痛烈に批判された四書を民衆は勉強させられており、忠、孝、節等儒教の旧道徳も提唱されている。「協和服」を纏う人が町を闊歩しており、長春はすでに「王道主義者」の町となった。

古丁の六十八歳の父親は他人と共同経営した百貨店が満洲事変によってつぶれてしまい、家族六人が不動産に頼って生活していた。古丁は早く就職して長男として一家の生計を担わなければならないが、就職口はなかなか見つからない。名前を徐長吉と変え、公学堂時代の先生のコネに頼り、年齢を五歳も偽って、一九三三年の末ごろ漸く國務院統計処属官の職についた。⁽¹⁵⁾その後、一九三四年十月から三ヶ月間内閣統計局統計職員養成所聴講生として訪日した。⁽¹⁶⁾國務院では、古丁は公学堂時代の同級生外文(一九一〇—?)と、中東鉄道で働いた経験を持つ疑遅(一九一三—?)と親しくなり、一九三六年あたりに「芸術研究会」⁽¹⁷⁾を結成して、文学活動を行う。この時の古丁の心境について、疑遅がその回想録の中でこう語る。

……この溝はまさに両民族の間の溝だ。これは大和民族からくる優越感のせいだ。多くの事実はこちらを証明する。例えば、教

育の設備や商品の供給……

あれは溝ではない、格差だ。主人と奴隸、征服者と被征服者の間には、この格差があるんだ。⁽¹⁸⁾

以上の引用は古丁と外文の会話である。北平で『味方——民族主義を蹴る——』の翻訳を通して日本人労働者との連帯を謳った古丁が、「民族協和」のスローガンが掲げられている「満洲国」では、地元民族と優越感を持つ大和民族との間に「溝」を見る。一方、その親友の外文の目には、それは溝ではなく、主人と奴隸、征服者と被征服者の格差に見える。彼らは「満洲国」の中枢機構國務院統計処に勤め、いろいろな情報に触れることができるからこそ、この「溝」や「格差」がはつきり見えていたのであろう。

芸術研究会のメンバーはこのように会話を交わしたり、励ましあったりして、新聞や雑誌に文章を投稿する。しかし、それは、「創作は難しいが、発表はもつと難しい」⁽¹⁹⁾時期であった。彼らに漸くチャンスが巡ってきたのは一九三六年の後半になってからである。その時、古丁らは、弘報処が中国語の総合雑誌を出そうとしていることを知り、昔の先生の紹介で雑誌『明明』の創刊に携わるようになる。彼等は自分で資金を出さずに発表の場を得ることが出来、「方向なき方向」(『没有方向的方向』、内実は文学に「××主義」等のレッテルを張らないという意味)に向かつてひたすら「書く」と刷る」(『写

与印』)ようになる。この雑誌は一九三七年三月に総合雑誌として創刊され、第一巻第六期から純文学雑誌に変わる。一九三八年八月十九号で停刊するまでに、一九三七年十一月に魯迅逝去一周年記念の「魯迅記念特輯」、十二月「日本文学紹介特輯」など特集号を出した。古丁訳「魯迅著書解題」と石川啄木著「悲しき玩具」がそれぞれの特集号に発表された。『明明』の停刊後、古丁らは「芸文志事務会」を結成し、一九三九年六月に文芸誌『芸文志』を創刊する。『芸文志』も第三期で停刊したが、古丁訳夏目漱石著「一夜」と武者小路実篤(二八八五—一九七六)著「井原西鶴」が同誌に発表された。なお、一九三九年十月に、古丁訳夏目漱石著の長編小説『心』が満日文化協会より東方国民文庫の一冊として出される。一九四一年対米英戦争の開始に伴い、「満洲国」も戦時体制に入る。一九四二年、古丁訳大川周明(二八八六—一九五七)著『米英東亜侵略史』が単行本として芸文書房から刊行される。一九四三年十一月、満洲文芸家協会の「満語」機関誌として『芸文志』が創刊され、そこに古丁訳高村光太郎(一八八三—一九五六)の詩、吉川英治(一八九二—一九六二)著「宮本武蔵」が発表される。

このように、一九四五年八月の「満洲国」の崩壊まで、古丁は数多く文学作品を翻訳した。⁽²⁰⁾前にも述べたように、その大体の傾向から見れば、「満洲国」での古丁の翻訳は三つの段階に分けることが出来る。第一段階(一九三七年)、「魯迅著書解題」と石川啄木の

「悲しき玩具」等左翼的傾向の作品翻訳。第二段階（一九三八年～一九四一年）、夏目漱石の『心』と武者小路実篤の『井原西鶴』等文学作品の翻訳。第三段階（一九四二年～一九四五年）、大川周明著『米英東亜侵略史』と高村光太郎著『殲滅せんのみ』と吉川英治著『宮本武蔵』等時局的と思われる物の翻訳。その各段階においての翻訳に、歴史背景と政治環境とはどのような関係を持つのか、それぞれの特徴は何か、それによって古丁の思想はどのように変化したのか、次は、時間順を追ってこれらの問題を検討する。その前に、当時の「満洲国」の社会情勢と翻訳界の実状について紹介しておく必要がある。

中国東北地方は漢、満、鮮、露等二十幾つもの民族が居住している。民族間の交流を図るために、昔から通訳、翻訳の活動が行われてきている。また、中華民国時代から外国文学の翻訳も始まった。一九三二年に建国された「満洲国」が、「民族協和」をスローガンに掲げ、関内と違う文化アイデンティティ、すなわち、中国文化と違った「満洲国」文化の確立を急ぐ。文学分野においては、一九四一年三月に公布された『芸文指導要綱』は上から文化活動全般に対して官僚的な締め付けを強めるものであり、「此の国土に移植されたる日本文芸を経とし、原住諸民族固有の芸文を緯とし、世界芸文の粹を取り入れ織り成したる渾然独自の芸文たるべきものとす」と述べている。⁽²¹⁾ それでも、この目標の中には「世界芸文の粹を取入

れ」との文句があるので、翻訳は、「満洲国」の政策に沿ったこととして、堂々と行うことが出来るはずである。実際、「満洲国」の政治、経済領域から日常生活まで、翻訳、通訳が活発に行われている。出版界においては、満日文化協会が「東方国民文庫」を出し、中には日本語ものと中国語ものがある。⁽²²⁾ 文学分野も例外ではない。長谷川濬（一九〇六―一九七三）が翻訳したロシア人作家バイコフ（一八七二―一九五六）の『虎』（満洲日日新聞社 大連日日新聞社、一九四二）、『偉大なる王』（文藝春秋社、一九四二）等は日本本土で一時ブームになった。大内隆雄（一九〇七―一九八〇）訳では、「満人」作家の短編小説集『原野』（三和書房、一九三九）『蒲公英』（三和書房、一九四〇）、古丁著『平沙』（中央公論社、一九四〇）等も日本国内で出版された。

「満人」作家にはそれぞれ日本語、英語、ロシア語に堪能な人がいて、彼らも積極的に世界各国の文学を翻訳紹介する。出版された単行本は、古丁訳の夏目漱石著『心』（満日文化協会、一九三九）のほか、山丁（一九一四―一九九五）編『近代世界詩選』（満洲図書株式会社、一九四二）、芸文志事務会編『訳叢』（芸文書房、一九四二）、李君猛（生没年不詳）訳夏目漱石の『草枕』（益智書店、一九四四）と菊池寛（一八八八―一九四八）の『貞操問答』（益智書店、一九四四）等がある。また、馮雪笠（生没年不明）訳火野葦平（一九〇七―一九六〇）の『麦と兵隊』と『土と兵隊』も早くから出版された。

単行本のほかに、新聞や雑誌に発表されたものも多い。

古丁をはじめとする芸文志事務会は、「満洲国」の「満人」文学翻訳界で最も活躍したグループである。彼らは、文芸の歴史が貧弱な満洲文壇には翻訳が必要だ、日本や中華民国と比べたら、「満洲国」の翻訳はまだ足りない、と認識し、創作と翻訳に励む。特に、古丁は出版界に世界文学全集の翻訳出版を呼びかけ、一九四二年十一月の「大東亜文学者大会」の分科会で大東亜文化交流のために国立編訳館の設立を提言した。結局、世界文学全集の出版は実現しなかったが、その代わりに『世界名小説選』（一九四一—一九四二）が満洲図書株式会社から出版された（筆者は五号まで確認している）。国立編訳館は満日文化協会等の協力を得、準備が最後まで行われたようであるが、結局その設立が見送られた。

一九三二年「満洲国」の建国、一九三七年日中全面戦争の開始、一九四一年十二月太平洋戦争の勃発、また、日本の蒋介石政府や米英との関係の変化等、時期情勢に応じて「満洲国」で施された文化政策が変わる。この変化との関係を視野に入れつつ、古丁が翻訳したテキストの内容と傾向を分析していきたい。

（一） 第一段階（一九三七年）の翻訳

1 「魯迅著書解題」

魯迅の逝去一年後の一九三七年改造社より日本語版『大魯迅全集』（全七巻）が刊行された。それは「満洲国」にも輸出された。「満洲国」ではそれまで魯迅の作品の中国語版の輸入が禁止されていた。そのため、「満洲国」の「満人」には魯迅作品を読むチャンスがほとんどなかった。

一九三七年、古丁は『大魯迅全集』の各巻の巻末の「解題」をまとめて翻訳して「魯迅著書解題」との題名で『明明』『魯迅記念特輯号』（一九三七年十一月）に発表した。「解題」は全集の各巻の最後に載っていた文章で、執筆者には増田渉（一九〇三—一九七七）、鹿地亘（一九〇三—一九八二）、胡風（一九〇二—一九八五）、松枝茂夫（一九〇五—一九九五）、小田岳夫（一九〇〇—一九七九）などがある。そして、最後に古丁の「訳後贅記」が付けてある。

「訳後贅記」の中で、古丁は、魯迅以外の東洋作家には「全集」の刊行に値する人が何人いるだろうかと問い、魯迅を東洋のもっとも偉大な作家の一人に位置づける。また、「彼（魯迅——筆者注）は人間として一人しかないし、彼の本は一冊しかないのだ。彼の、今日から昔へ、また昔から今日へと繰り返して論じることの目的は一つしかない、それは絶望の中から希望を見出すことだ」と魯迅の

精神をまとめる。「魯迅の著作に縁がない満洲の読者にも、これだけで魯迅のことがだいたいわかってもらえるだろう」と翻訳の目的を述べる。なお、「満洲には文学があるのか? これは一つの鏡だ。これを以てわれわれの文学を照らそう」と言う。それは、つまり、魯迅の「絶望の中から希望を見出す」精神を学んで文学創作に励もうとの意味である。

また、魯迅の「絶望の中から希望を見出す」ことを学ぼうと言っているが、満洲の文学者にとって「絶望」とは何か。これについて「満洲国」の文化政策を検討していきたい。

「満洲国」では一九三二年九月に「治安警察法」が公布され、民衆の自由集会を禁止した。それは各地の激しくなるばかりの反日闘争を撲滅するためである。同年十月に「出版法」が發布される。その中に「満洲国」の国家組織の大綱を変革しようとする、国家存在の基礎を危うくする、外交及び軍事機密を漏洩する、国交に重大な影響を与える、あるいは破壊する、国家に対する犯罪を煽る、などに関する出版は禁止される、と規定する。つまり、日本の占領と「満洲国」を認めた上で出版活動を行わなければならないとし、いわゆる「反満」「抗日」の出版物が取り締まりの対象となる。また、「満洲国」のもう一つの重要な政策は「防共」である。一九三〇年の中国左翼作家聯盟の成立に伴い、左翼文学運動が満洲にも及んだ。一九三三年八月から「満洲国」政府系の新聞『大同報』、哈爾濱の

『国際協報』等に、左翼青年が編輯した文学欄が開設され、そこに満洲農村動乱、経済不振、階級対立、民族危機等を暴露する文章が発表される。そのため、「満洲国」政府は「黒竜江民報事件」(一九三六年)、「哈爾濱口琴社」(一九三七年)⁽²³⁾事件を起こし、厳しく取り締まった。左翼作家は蕭軍(一九〇七—一九八八)・蕭紅(一九一—一九四二)のように関内に逃げたり、金劍嘯(一九一〇—一九三六)・侯小古(一九一三—一九三七)のように殺されたりする。また、一九三七年七月の日中全面戦争の勃発によって日本本土は総力戦体制に入り、「満洲国」では左翼的、反日的言論の取締りがいっそう厳しくなる。満洲文芸界の人々は先ず命の保全を考えなければならぬ。ゆえに、「満洲国」文壇からは、進歩的な作品が姿を消してしまい、「小市民の遅れた意識にあわせた」「粗末な武俠、哀情、香艷、探偵を主題にする章回体裁の小説」が盛んになり、「文学の前進」の道を「阻害」⁽²⁴⁾してしまう。また、この風潮を助長するように、第一回盛京文芸賞が通俗文学に与えられた。⁽²⁵⁾

このような政治環境と社会状況の重圧を受け、通俗文学の跋扈する文壇の中で、新文学の発表の場は失われてしまう。満洲の新文学を志す青年たちは、日本民族との「溝」や「格差」をますます大きく感じ、「主人と奴隸」「征服者と被征服者」という意識がますます強くなっただろう。従って、彼等は「絶望」に近い状態に陥ったと考えられる。

古丁の場合には、そうした客観的な原因のほかに、個人的体験も考えられる。

最後の夢も瞬く間に脆くて破れてしまった時、私は何冊かの辞書と一部の文学史を携えてその埃まみれの都市（北平——筆者注）を離れた。……それ以来、私はほとんど絶望に陥ってしまった。アルコールの援けによって日々を送り、忘却と滅亡を求めていた。明日ということは更に思い出すことができなかった。⁽²⁶⁾

逮捕、そして左翼革命の流れからの脱落と挫折も、古丁をさらに無力にし、絶望させる原因となるであろう。

ところが、「落ち込んで久しくなると、心身とも疲れを感じ、自ら更新を求めるようになる。それで、同じく文学を愛好する何人かの友人が偶然に集まってきて、何も大した目的も無く、ただ励ましあつて読書したり文章を書いたり」するようになる。古丁等は絶望の中から何とか希望を見出し、「淀んだ水面を破り小さな波浪を起させよう」とする。⁽²⁷⁾それは「芸術研究会」の結成と『明明』の創刊につながる。しかし、文学の道を歩み続けていくには、鲁迅のような強くて希望を持った人の導きが必要である。

まとめていうと、「鲁迅著書解題」を翻訳した目的として主に三つある。一つ目は、鲁迅と縁のない満洲の読者に鲁迅及び鲁迅の著

書の内容を紹介する。二つ目は、絶望に近い満洲の文学者に鲁迅をひとつの「鑑」、つまり見習うモデルや目標として提示する。三つ目は、満洲文学者及び自分自身を励ます。この三つの目的には彼の植民地統治文化政策に対する抗争、現実文壇情況に対する不満、自己更新しようとする意欲が見られる。

再び、「訳後贅記」に戻る。本文の翻訳について、古丁は、①原文の中に鲁迅の作品の引用がある場合、見つかったものならそのままコピーするが、見つからなかったものは、訳出する。②原文の中に削除したり、或いは書き替えたりしなければならないところがあれば、削除したり書き替えたりした、という二点を書いている。この二点のうち②のほうに興味深い。いったい、どこを削除して、どこを書き替えたのか。翻訳文を一九三七年改造社版『大鲁迅全集』と対照しながらそれを明らかにする。

まず気がつくのが、各巻末の「解題」に新しく加えたタイトルのことである。例えば、原書の第七巻「解題」の「書簡」というタイトルの下に、すぐに鹿地亘、山本初枝（生没年不詳、増田渉三人の文章がある。つまり、原文では、以上の作者の文章には独立したタイトルは付けられていない。ところが、古丁の訳の中には、鹿地亘の文章に「这是鲁迅的绝笔」（これは鲁迅の絶筆である）、山本初枝の文章に「全都是成办追忆的种子的东西」（すべて思い出の種になつてしまった）、増田渉の文章に「写给日本人的东西」（日本人へ）と

それぞれ新たにタイトルが付けてある。その意図は、「訳後贅記」で述べたとおり、「読みやすくするため」である。

次に、その「削除したり書き替えたりした」ものを検証する。第四巻の『隨筆・雜感集』の巻末の「解題」は胡風が書いたものである。胡風はそもそも中国左翼作家聯盟のメンバーで共産黨員であった。その文章には「左翼」や「革命」等のことばが当然出てくる。しかし、古丁の訳文の中ではそれらのことばはすべて消えてしまった。その中には削除されたものもあれば、書き替えられたものもある。

以下の六つの例は中国語訳文章から完全に消えてしまっている。（それぞれ削除された理由はおそらく傍線部の文言があらわした内容にある。傍線は筆者が引いたもので、その内容は文末の括弧にコメントとして入れておく。）

- ① (一九三一年) 九月の……までは、僅かな非合法的活動に留まらなければならなかった。(満洲事変を暗示する)
- ② 反動勢力(民族的な残酷な敵と民族的な暗黒な伝統)(日本を示す)
- ③ 現在の中国に彼が生きて往く限り、当然彼は「新興の無産者」のために力を尽すことになる外はなかった(左翼勢力を指す)
- ④ ソヴェートの文芸理論の中国への最初の紹介であつたばかりでなく

⑤ 血腥い統治に対する魯迅の痛々しい反抗を要視せず(左翼取締りのことを示す)

⑥ 上海戦争後の民衆運動の昂揚に乗じて(一九三二年日本軍の上海占領後の民衆の反日運動を暗示する)

書き替えられたもの(矢印の下は訳文)

- ① 中国革命↓中国××
- ② 国民革命の勢力↓南軍的勢力
- ③ 中国左翼作家聯盟↓作聯あるいは作家聯盟
- ④ 無産階級文芸運動↓新興文学運動
- ⑤ 革命文学者↓新興文学者
- ⑥ 民族の敵↓人類之敵
- ⑦ ソヴェート↓新俄
- ⑧ 反動勢力↓陳腐勢力

ほかに「左翼作家」を「作家」、「ソヴェートの共産党の文芸政策」をただ『文芸政策』、「圧迫された民衆」を「民衆」に省略したものがあるのちに見られる。

このように、「革命」「左翼」「無産階級」「ソヴェート」等左翼色のことは書き替えられた。それだけではなく、「反動」「民族」

「血腥い」「圧迫」等のことばも消されてしまった。前者は「左翼」「共産党」を思わせ、後者は「日本の植民地統治反対」、つまり「反日」をほのめかしているからであろう。なお、完全に削除された文章からみれば、「革命」や「抗日」を意味する記述は禁止されていた。このように、「原作者にはもちろん忠実ではなく、読者には誠実ではない」（訳後贅記）翻訳の唯一の目的は、そうしてでも「この文章を読者の前に届けるため」という。このように「削除したり書き替えたりした」行為は、一九三六年「黒竜江民報事件」、一九三七年「哈爾濱口琴社」事件から見られた「満洲国」政府の厳しい取締りに対処するものである。

疑滞の回想録によれば、『明明』はそもそも「満洲国」政府弘報処の要請に応じて創刊されたもので、政府に対抗する「過激な言論」が禁止されている。当然「左翼」とか「反日」を思わせる「過激な言論」は登場しない。古丁のこの「削除したり書き替えたりした」行為は、「満洲国」の共産党と「抗日」に対する厳しい取締りと、「文章を書くためにむだに命を落とす必要はない」、⁽²⁹⁾という古丁のスタンスがわかる。

日本本土では社会主義運動は厳しく弾圧にさらされる時、「伏せ字」で逃れることが発明されたが、「満洲国」でも伏せ字とともに「削除」や「書き替え」の方法が使われる。北平で日本プロレタリア小説を翻訳する時、原文の「××」を読める文字に書き直した古

丁が、逆に「満洲国」で日本語原文ではっきり示された文字まで中国語文に伏せ字にしたり、「削除したり書き替えたり」しなければならなくなる。それだけ「満洲国」の言論弾圧の方が徹底していたことを意味する。このような作業を行う時、古丁の心境はいかなるものであつたろうか。「訳後贅記」に「秋夜が寒くて静かだ」（「秋夜冷而静」と書いてあるが、彼の感じたその「寒さ」と「静かさ」の度合いは並大抵のものではないであろう）。

一方、これほど厳しい政治環境の中で、自ら「削除したり書き替えたり」してもなお魯迅を紹介したい、という古丁の強い気持ちがあるかがわかる。直接の社会的活動は行わないものの、北平時代に燃えていた左翼の情熱がまだ冷めていないと思われる。

2 「悲しき玩具」

石川啄木の中国での紹介は、一九二二年に胡適（一八九一—一九六二）の依頼を受けた周作人（一八八五—一九六七）が、「石川啄木の歌」（短歌十七首とその歌論）を『努力週報』に発表したことに始まる。そこには「悲しき玩具」の歌が十五首選ばれた。⁽³⁰⁾

一九三七年十二月『明明』第二卷第三期の「日本文学紹介特輯」に古丁訳「悲しき玩具」が発表され、一九四三年十月に芸文書房からその単行本が出された。『悲しき玩具』の次の啄木作品の単行本（周作人訳）が出たのは、一九八〇年代になってからである。

一九一二年六月東雲堂より刊行された『悲しき玩具』には百九十四首の歌のほか、「一利己主義者と友人の対話」と「歌のいろいろ」の二篇の歌論と、土岐哀果（一八八五—一九八〇）の文章が収録されている。しかし、古丁訳「悲しき玩具」には二篇の歌論と土岐の文章が収録されていない。また、百九十四首の歌の内の百八十八首だけが翻訳され、他の六首は外された。

啄木の短歌は中国新詩発展に大きな影響を与えたが、古丁の「悲しき玩具」の翻訳は、その主な目的が「満洲国」の詩歌発展にあるわけではないようである。彼はその前書きに当たる文章の中でこう述べている。中学時代から啄木を愛読し、その翻訳も試みた。そして、今回の翻訳の直接のきっかけは、

この夏、三中井の『啄木展』を見て、まだ啄木を展示する人がいると思つて、また啄木を翻訳したくなった。（今夏観三中井的「啄木」展、看到有人展覽他、便又想译啄木。

また、

啄木の遺産は短歌だけではないが、いちばん貴重なのは短歌だと言つてよい。

（啄木の遺産不止短歌、但是他的遗产的宝贵的最宝贵的要数短

歌。）³¹

と啄木の短歌を高く評価し、「啄木の短歌は人を深く感動させる原因が『真』にある」と述べている。その「真」とは、「偽りのない感情（不是无病呻吟）」である。

「悲しき玩具」には作者の日常と闘病生活が描かれている。「偽りのない感情」とはそれを指すのであろう。「悲しき玩具」の社会背景には、幸徳秋水等の社会主義革命及び大逆事件でさわぐ明治社会がある。五歳の息子まで「革命」「労働者」等のことばを覚えたほどといわれ、啄木も、この二つのことばをよく口にし、革命や労働者へ強い関心を持ったと分かる。しかし、貧しくて、不治の病に罹った啄木は、革命や労働者に対する感情は議論に止まり、それ以上何も出来ない。そのような無力感が彼の日常と闘病生活につきまとう。啄木のこの感情の「真」を高く評価した古丁には、啄木を深く理解した上での啄木のその感情への共感があつたと思われる。

疑遲の回想録によれば、一九三六年前後「芸術研究会」を結成した時、古丁は以下のような文章を起草した。

われわれは苦悶している。当然、それぞれの苦悶には、それぞれの特異な出発点があるはずだ。口を持っているのにもかかわらず、われわれは「おし」か「どもり」だ。目があるにもかか

わらず、われわれはいつも「盲目」だ。「盲目」でなければ、近眼か遠視だ。耳があるにもかかわらず、われわれは「つんぽ」だ。われわれは健全な官能を持った「不具な人間」だ。

われわれはみな聡明だ。呐喊の内に生を求めなければ、沈黙の中で死ぬしかないと知っているからだ。タバコや酒や女——われわれはそれらの中で自らを滅ぼしている。風花や雪月——われわれは、それらの中で麻痺させられている。われわれの生命はそんなにも無用なものなのだろうか。われわれの時間はそんなに低廉なものなのだろうか。われわれは苦悶している。われわれは苦悶を延長するのではなく、昇華すべきだ。⁽³²⁾

その時の古丁は、「満洲国」の社会環境の重圧の中で、自分たちが健全な官能を持っているにもかかわらず、「不具な人間」のように感じている。この「不具な人間」という実感が、病身の啄木への共感を生んでいるともいえよう。それに、当時の古丁も幼い子供を持ち、仕事より文学に熱心な面もある。この二点において、古丁は啄木に理解を寄せやすかったであろう。

「悲しき玩具」の中に悲しい、泣く、病、痛い、薬、寝汗、死ぬなど負の感情を表すことが二十何回も使われ、それを通して、啄木の悲しみが脈々と伝わってくる。しかし、啄木は悲しいばかりで

はない、彼は希望をもっている。次に例をしめす。

① 曠野^{あちの}ゆく汽車のごとくに、／このなやみ、／ときどき我的心を通る。

仿佛是奔驰旷野的火车似地／这烦愁、／时常时常通过我的心。

② いつまでも歩いていねばならぬごとき／思い湧き来ぬ、／深夜の町町。

涌出了／仿佛永远不得不走似的念头／深夜的一条条街巷。

③ かかる目に／すでに幾度^{いくたび}会えることぞ！／成るがままに成れと今は思うふり。

那样厄运／已经遇见过好几次了！／现在心思着…／愿意怎样就怎样罢。

④ 何^{なん}となく、／今年はいい事あるごとし。／元日の朝晴れて風無し。

无端地觉得／今年似乎有好的事情。／元旦的早晨、／晴朗无风。

⑤ その親にも、／親の親にも似るなかれ——／かく汝^なが父は思へるぞ、子よ。

可别肖其父／也别肖其父之父——／你的父亲是这样想着呢、孩子啊。

例①の、「曠野ゆく汽車」とは、勢い強く襲ってくる悩みの喩え

である。これは啄木の悩みを表しているが、前述のように古丁も深い「苦悶」を持つている。例②は深夜の町を何時までも歩かなければならないという作者の不安が読み取れる。不安を抱えながらいつまでも歩かなければならないのか、或いは、この町々を歩きたくないが逃げる事が出来ず歩かなければならないのか、とりあえず、作者は深い不安を抱えている。「削除したり書き替えたり」しても鲁迅を紹介する「健全な官能を持った『不具の人間』」である古丁は、まさにそのような気持ちではないであろうか。例③の「成るがままに成れと今は思うなり」とは、努力しても邪魔が入り期待される目標には達せない、そこで半ばあきらめるような気持ちを感じられる。そのあきらめの中には現実に対する反抗が貫けないあまりの絶望が読み取れる。実は、「愿意怎样就怎样罢」と似た意味の「他去罢」が「鲁迅著書解題・訳後贅記」等、古丁の文章の中にもよく出てくる。⁽³³⁾例④は、「何となく」でありながら、期待を持つ。閉塞する明治社会にあきらめずに、新しい社会の将来への期待を持つ。ここに啄木の将来に対する信念が表れている。例⑤の子供は将来の象徴であるから、子供への期待はつまり将来への期待である。このように、啄木は現実を悲しみながら将来への希望を失っていない。ただ、啄木のその期待は、よりいいほうに変ってほしいという善良な願いにすぎない。その実現は病身の自分には不可能で、他の人に託さなければならない。ときには絶望のあまり、自己放棄の感情に

陥ることもある。それにもかかわらず、彼は明日への希望を持っているのである。これこそ大事なことである。そう考えながら古丁は「前書き」の最後に「詩人は『明日が来るのを信じ』なければいけない」と書いたと思われる。

このように見てくると、一九一〇年ごろの明治期の日本と「満洲国」、という社会背景の違いはあるが、閉塞的な現実に不満を持ち、悲しんだり苦悶したりした点においては、啄木も古丁も同じである。絶望に陥りそうな古丁は自己更新を図ろうとし、啄木の将来への希望を高く評価して、満洲の文学者に明日に希望を持つと呼びかける。そして、「苦悶」を昇華させ、自らの努力を通して明日への希望を実現させようとする意欲も読み取れる。

まとめてみれば、古丁は「悲しき玩具」に表れた啄木の感情に深い理解と共感を持ち、それを借りて自分の気持ちを表す。また、啄木の明日への希望を用いて、自分を含めた満洲の文学者を励まし、文学創作を進めて行こうと呼びかける。これこそが古丁の「悲しき玩具」を翻訳した主な理由と考えられる。

では、どうして百九十四首の歌のうち、百八十八首しか翻訳しなかったのか。はずされた歌はどんなものなのか。

①二晩おきに、／夜の一時頃に切通の坂を上りしも——／勤めなればかな。

②しつとりと／酒のかおりにひたりたる／脳の重みを感じて帰る。

以上ははずされた六首の中の二首である。①は勤めがあるから切通しの坂を二晩おきに上らなければならない、ということ、②はお酒の香りの嗅ぎすぎで頭を重く感じながら帰るといふことを述べている。その内容は、二首とも単純な事実しか述べていなくて、言外の意が乏しい。他の四首も似たようなものである。つまり、この六首は、芸術性が高くないと判断されたのかもしれない。

そもそも、「悲しき玩具」は啄木の逝去後そのノートのまま刊行されたもので、校正もされなかった。これについて歌集の後ろに土岐哀果が、啄木が「生きていたら訂したいところもあるだろうが、今は何ともしようがない」と書いている。つまり、「悲しき玩具」は啄木の草稿なので、中に推敲が必要なものが入っていても不思議ではない。土岐らが啄木の遺作をノートのままで出版させたことはそれなりの価値があるが、厳選した啄木の歌を「満洲国」の読者に紹介するのも取るべき態度と思われる。

つまり、古丁が六首の歌を落としたのは、「魯迅著書解題」と同じく検閲を心配したためではなく、彼なりの文学の芸術性から判断したことであろう。その芸術性へのこだわりは、彼自身の翻訳にまで及ぶ。「前書き」に、古丁は、自分の翻訳は「音も色もなく、形

しか残っていない」「詩の翻訳はほとんど不可能」であることが分かったと結論づける。確かに、原文に比べたら、日本語の流暢なりズム感と分かりやすさは生かされていないかもしれない。が、訳文だけを読んでみても必ずしも悪いとは思われない。例えば、一四三頁の例②からみれば、原文は体言止めで一つの文章になっているが、翻訳文には二つの文章が並んでいる。中国語には体言止めの文章も無いし、長い限定語を持つ文章も洗練されていない。そのため二つの文章になる。この場合、二つの文章の相関関係が説明されなければならぬ。しかし、詩であるから、接続詞を入れると説明的になってしまう。関係不明のまま並んでいる二つの文章は、理解するには少し難しいが、できないわけではない。そこに、かえって訳詩らしいモダンな感じが出てくる。これは原詩にない趣である。言い換えれば、この短歌の翻訳は、原文より劣ったところもあれば、原詩にはない効果が出たところもある。古丁は原文への忠実性を追求していたからこそ「詩の翻訳はほとんど不可能」との感慨が生まれたのではないかと思われる。

「魯迅著書解題」と「悲しき玩具」、つまり、「満洲国」における古丁の第一段階の翻訳の特徴は次のようにまとめられる。

二つの作品とも現実に対する抵抗が強く出たものである。そこに古丁の左翼時代の情熱が冷めていないことが読み取れる。「魯迅著書解題」の左翼的、反日的と思わせることを削除したり書き替え

たりしたことは、自分の目的（翻訳した文章を読者に届ける）を実現するために、戦略的なこと（削除したり書き直したりして、その左翼的な情熱を隠す）を考えていたと見られる。この二つの作品から同じキーワード「希望」を見出したことから、古丁の抑圧と苦悶、絶望を乗り越え、「明日への希望」のために闘おうとする意欲が読み取れる。これは後の彼の行動につながる。翻訳方法は、基本的に原作に忠実な直訳である。また、「悲しき玩具」の翻訳から作品の芸術性を重視する傾向がうかがえる。

（二） 第二段階（一九三八年～一九四一年）の翻訳

この段階は満洲文壇のいちばん活発な時期である。古丁をはじめとする「芸文志派」と山丁をリーダーとする「文選派」との間に、「郷土文学」に関する論争が起り、それはまた創作と出版の競争に発展していく。『芸文志』『文選』等文芸雑誌が相次いで創刊され、優秀な作品が数多く刊行される。山丁らのグループは、「描写真実」「暴露真実」のスローガンを掲げ、「文選刊行会」を組織し、「文選叢書」を出版する。一方、古丁のグループは、「方向なき方向」「没有方向的方向」に向かい、「書く」と刷る」「写与印」を主張し、「城島文庫」「駱駝文芸叢書」等を刊行する。この二つのグループはそれぞれのスローガンを掲げていて、いかにも文学態度が違うように見えるが、実は、その作品に表れたのはいずれも「満洲国」の

「暗さ」で大した違いがない。古丁個人は、一九三九年一月に短編小説集「奮飛」で盛京文芸賞、一九四〇年四月に長編小説「平沙」で民生部大臣賞を受賞する。それによって、彼は「満洲国」の「満人」作家の代表と見なされるようになる。古丁は、第一段階で苦悶して「希望」を強調していたが、この段階になると、文学上ある程度の成功を収めたためか、前のような絶望で苦しそうな調子がなくなり、そのかわりに、「心に無限大の希望が溢れ」るようになる⁽³⁴⁾。

この時期、古丁は「ユーゴリ (Nikolai Vasilevitch Gogol 1809-1852) の『狂人日記』 (Zapiski sumasshedshego, 1835) やモーパッサン (Henri Rene Albert Guy de Maupassant 1850-1893) の『ボーイ・ビールをもう一杯』 ("Garçon, un bock!" in Miss Harriet, 1884) 、ガルシン (Vsevolod Mikhailovich Garshin 1855-1888) の『夢がたり』 (To, cheno ne bylo, 1882) 、『アッタレーア・プリンケプス』 (Atalaa princes, 1880) を含め、数多くの作家の作品を翻訳した。古丁はユーゴリのものに「内心の苦痛を隠し、ユーモアと風刺とで、彼の一人民としての気持ちを痛快に叙べる」手法を見出した⁽³⁵⁾。そして、「狂人日記の主人公はまだ我々の現実社会の中に生きている。(略)『お母さん、この哀れな倅を助けてください！』という叫びはまだ人の心に痛ましく響く、私は文学の『不朽』が分かったようだ」(狂人日記の人物仍然活在我们的现社会里、(略)『母亲、救救你的可怜的儿子罢！』却仍然读来令人沉痛、我仿佛明白了文学的『不朽』⁽³⁶⁾)。モーパッサ

ンの「ボーイ、ビールをもう一杯」は、貴族の家庭に生まれた主人公が、幼い時、父親が母親を殴る場面を見てショックを受け、大人になって毎日ビールに溺れながら日々を送る人となる話。ガルシンの「夢がたり」と「アッタレーア・プリンケプス」は「動植物界を借りて語る童話式小品」⁽³⁷⁾である。これらの翻訳から古丁が様々な文学の手法、題材、ジャンル等に対して関心を持っていたことがうかがえる。しかし、この時期、古丁の関心はそこにとどまっているわけではない。次に夏目漱石の『心』と武者小路実篤の「井原西鶴」を通してその特徴を見る。

1 『心』

古丁は生涯二つの長編小説を翻訳した。その一つは、夏目漱石著『心』である。古丁の翻訳活動の第二段階においては、『心』の翻訳は大きな出来事である。もう一つは、一九七九年に出版された葉山嘉樹（二八九四—一九四五）の『海に生くる人々』の翻訳である。後者については「満洲国」時代の古丁翻訳を対象とする本稿では触れない。中国語版『心』は、一九三九年十月に「東方国民文庫」の満語書籍として満日文化協会より出版された。小宮豊隆（二八八四—一九六六）の「解説」と古丁編「夏目漱石伝略」がつけてある。これは夏目漱石の『心』の最初の中国語訳による単行本となる。この本の出版に至る経緯が、その「訳後小記」の中に記されている。

『心』を翻訳し終わったら、長編であるため出版元が問題になる。辛嘉に文協の杉村さんを紹介してもらい、やっと出版されるようになった。

月刊満洲社は一九三八年九月まで雑誌『明明』を出版したが、『心』を出版してくれない。その理由は、『心』が売れなくて儲からないと判断されたためであろう。⁽³⁹⁾その時、満日文化協会が「東方国民文庫」を出しており、『心』はその一冊として出版されるようになる。

「訳後小記」には『心』の翻訳の経緯も述べてある。古丁は、満中学堂時代から漱石を愛読し、それを紹介しようと思った、という。それから『草枕』の冒頭の一節を引用してから、

私は文学を愛する。特に文学の中の哲学を愛する。彼の『草枕』の第一章の冒頭にはこれほど綺麗な文章が書かれ、これほど奥深い哲理が導き出されている。私はむしろ『草枕』を読んではから詩と画を愛するようになった。しかし、今私には詩も画もない。（我愛文学、尤其爱文学之中的哲学、他的「草枕」的开宗明义第一章、就写着这样美丽的文章、就道着这样奥蕴的哲理。诗和画——我母宁是读了「草枕」才特别爱起来、但是我现在无诗也无画。⁽⁴⁰⁾）

ここで古丁は漱石に惹かれる理由として、その文学の中の「哲学」「奥深い哲理」をあげている。「哲学」や「哲理」は、この時期古丁の文章（『消閑雜記』⁴¹）の中にも、古丁を評する文章（辛嘉「關於古丁」⁴²等）の中にもよく出てくることばである。そして、場合によってその「哲学」の意味が微妙に違う。ここに出てくる「哲学」や「哲理」については、具体的な説明はないが、『草枕』の冒頭の引用から見れば、それは「人生の道理」として理解しても大した間違いがないと思われる。「人生の道理」は「階級的観点」とは違う。「階級的観点」は左翼文学のいちばん大きな特徴で、左翼作家、特に中国左翼作家聯盟の作家たちは、それをういてあらゆる社会現象を分析する傾向がある。古丁の左翼作家聯盟時代はもちろん「満洲国」での最初の作品の主題も「階級的観点」に沿ったものが多い。⁴³階級的観点は古丁の今までの「哲学」と理解できる。「消閑雜記」の中で、文章を書きだせない古丁は、『大夢記』『江山』『艷歌』『九歌』『君子行』『美人行』『悲回風』『劉伶飲酒』『青草』、のようなタイトルだけたくさん書き出したが、その主題、つまり哲学が見つからない」と言っている。この「哲学」の意味ははっきりと「主題」を含む思想的内容の意味で用いられている。また、「夏目漱石の長編『心』を翻訳してから、私の哲学が一掃されてしまったようだ」とも書いている。すなわち、『心』を翻訳する段階にな

ると、古丁は「階級的観点」ではなく「人生の道理」を追求するようになる。これは大きな変化である。その変化の背景には、もちろん「満洲国」の厳しい取締りがあるが、そのほかに、魯迅の文学思想の影響も無視できないと思われる。

魯迅は中国左翼作家聯盟の旗手と言われるが、一九三〇年代初頭の左翼青年たちのなかには、その作品をしつかり読んだ人がそれほど多くないと思われる。なぜなら、抗日宣伝や国民党政府への抗議デモで忙しく、彼等にはあまり時間がないからである。古丁の場合は亡命中の生活の心配もあつただろう。しかし、一九三七年に日本で出版された『大魯迅全集』の解題を翻訳することを契機に、古丁は魯迅をじっくり読み、その精神を掴み、魯迅に対する認識と理解を深めた。いや、寧ろ魯迅精神への理解と認識を深めた上で、その「解題」を翻訳する気になったと言ったほうが正しいかもしれない。

魯迅は、創造社メンバーから、一九二八年に始まった「革命文学」に関する論争によって左翼に「転向」したといわれるが、魯迅自身はそう認めなかった。魯迅文学の内核は、中国伝統文化の中の負の一面を批判し、それによって阿Qを代表とする中国人の麻痺、無知の精神世界を改造しようとするものである。この中国文化批判は階級的視点をはるかに超えたものである。魯迅の左翼への接近は、中国人の精神世界を改造するための方法の模索の過程に過ぎない。つまり、魯迅の闘いの目的は、無産階級革命の勝利を獲得するよ

り、むしろ中国人の精神世界を近代的に改造するところにある。このような魯迅精神の影響はその後の小説『新生』等にも見られる。

右に述べてきたように、この時期の古丁の文芸思想は左翼文学思想から魯迅式「人生の道理」へと変わった。また、この「転向」はいきなり起こったことではなく、南満中学堂時代から愛読した漱石の影響もあると考えられる。

「訳後小記」にはその『心』の翻訳に至る経緯が続けて語られている。

最初に紹介しようとするのは『虞美人草』で、(中略) 思わずその俳句が連なつたような文章にぶつかり、私は訳しては止め、止めては訳し、結局(前へ進むことが出来ず)最初の計画をあきらめなければならなくなつた。そして、本箱の中から『心』を捜し出した。その小さな本の上に「一九三二年読」と書いてあるが、その時から既に八年も経つたのだ。これを翻訳してみると、さほど難しく感じなくて、そのまま翻訳していった。

(起初想紹介的是「虞美人草」、(中略) 却不料那句句是俳句的文章、使我译而复辍、辍而复译、终于抛掉了原来的计划、才从书箱里翻出来「心」。那本小书上写着「一九三二年读」、距今已有八年了、译起来很省力、就译了开去。)⁽⁴⁴⁾

古丁は『虞美人草』を翻訳しようとしていたが、挫折してしまつて、『心』に変わったのである。なぜ『虞美人草』なのか、その理由についてははっきりした説明が示されていない。しかし、以下のいくつかのことを合わせて考えてみればその理由は分からないでもない。

前に触れた山丁の「文選派」と古丁の「芸文志派」の間で行われた「郷土文学」に関する論争は創作と出版の競争に発展していく。古丁らは長い小説を書くこうとして『明明』で「百枚小説」を提唱し、一卷第六期に小松の「洪流の陰影」と古丁の「原野」が発表された。次第に彼らは百枚小説には満足できず、さらに長編小説を書くこうと考えるようになった。しかし、その時、古丁は書き出せなかった。

小松と私は仲のいい文字パートナーで、我々は同時に「百枚」を書き始めた。(中略) 彼が『泰東日報』で『無花的蔷薇』という三百枚の小説を連載した時、私は書き出せなため、同じく三百枚くらいの『心』を翻訳した。彼が『蒲公英』を書いた時、私は『平沙』を書いた……(小松跟我是很好的文件、我们同时写起了「百枚」。(中略) 他在『泰东日报』连载「无花的蔷薇」这约三百枚长篇的时候、我因为写不出来、就译了也是三百枚的长篇「心」、他写「蒲公英」我写「平沙」)⁽⁴⁵⁾

長編を書きたいが、書きはじめることができない。それで漱石の小説を翻訳した。つまり、古丁は創作の代わりに『虞美人草』を翻訳しようとした。『虞美人草』は新聞連載小説で漱石の最初の長編である。登場人物は藤尾を中心に、小野清三、甲野欣吾、宗近一、小夜子、糸子など十人あまり、それぞれ違う性格を持つ。また、小説の中には伝統と近代、利己と徳義等いくつかの衝突の線が走っている。物語はこれらの衝突の線に沿って登場人物の相互作用のドラマを展開する。『虞美人草』は一九三五年十月に溝口健二監督で映画化されてもいた。古丁は『虞美人草』の翻訳を、その長編小説の展開の仕方等を学ぶために行おうとしたと思われる。

しかし、「訳後小記」によれば、『虞美人草』の文体は難しく、古丁は手に負えなくなる。それで手元の『心』を翻訳するようになる。『虞美人草』とは違って、『心』はドラマチックな物語ではなくて、人間の内心世界を深く細かく描くものである。当時の満洲文学は素材主義にとどまっており、文学者が心理描写の技法をマスターしていなかった。古丁は『心』の翻訳を通して心理描写の技法を学ぼうとしたと考えられる。それは、『心』の翻訳後に発表された『平沙』（一九三九年十二月）に、その前に発表された『原野』（一九三八年三月）より、心理描写の内容が明らかに増えたことから分かる。

また、『心』の翻訳に古丁は文学的な工夫を凝らした。その特徴

を明らかにするために、次に『心』の古丁訳を戦後の周炎輝訳及び周大勇訳と比べて検討してみる。

① それでも今厄介になっている私だって同じ事ではないかと詰ると、私の気心は初めから能く分かっていると辯解して已まないのです。

又頂嘴道那么现在住着的我不也是一样吗、但是却辯解着起初就知道我的根性而不已。(G)

我反问她说、开头对于我这个来借住的人不也一样不了解吗？她辩解说从一开始就很

了解我的性格。(H)

我逼问一句……「那么现在住着麻烦的我、不也是一样吗？」她说、我的性情脾气、一开始就知道得很清楚的。(Y)

日本語では主語がよく省略される。しかし、中国語では主語が明記されないと動作主を特定することができない。それで主語はほとんど省略されない。例の文章のように、二人が交替して動作を行う場合は、なお省略できない。周炎輝訳にも周大勇訳にも「我」、「她」がはっきり記されているが、古丁訳だけが日本語のまま省略されている。

② 貴方の大事な御父さんの病氣を其方退けそっちのにして、何であなたが宅を空けられるのですか。

扔开你敬重的父亲、你怎么能够离开你的家呢？（G）

我怎么能够让你丢下你至亲的父亲病于不顾、从家里跑出来呢。

（H）

你怎么能够把紧要的父亲病扔在一边、离开家呢？（Y）

これは動作主と動作の問題である。一人の動作主「貴方」に「其方退け」にし、また「空けられる」という二つの動作が伴っている。この場合、中国語文法の習慣に則る処理なら、周炎輝訳のように話手の「我」を持ち出して使役形の文章にするか、周大勇訳のように主語を二つの動作の前に持つていくか、どちらかである。しかし、古丁訳は原文のままで、動作主は二つの動作の間に置かれている。

③ 私にそれが出来なかったのは、学問の交際が基調を構成している二人の親しみに、自ら一種の情性があつたため、思い切つてそれを突き破る丈の勇氣が私に缺けて居たのだという事をここに自白します。

我没能这样去做、我要在这里告白这是因为学問的交際构成着基础的两人的交情上自然有着一种情性、所以我竟缺乏着决意突破这情性的勇氣所致。（G）

我坦白的对你说、我之所以没能这么做、是由于我们两人的友谊是以学問上的交往为基調的、在这里自然产生了一种因循、而我缺乏下決心突破它的勇氣。（H）

我在这里自己坦白说了吧、我没有能那样做、那是由于两人的亲近是把学問上的交往作为基調的、这就自然而然产生了一种情性、因此我缺乏大胆的去突破它的勇氣。（Y）

原文の学問の交際が基調を構成しているは「二人の親しみの限定文となるが、中国語に訳される時、「以……为」の文型になったほうが文法のルールを守っていると思われる。古丁訳は日本語文章の並び方のままで、中国語文法としては違和感を感じる。

④ 私はあなたに対して此厭な心持を避けるためにでも、擱いた筆を又取り上げなければならぬのです。

我即便是为着对于你避免着厌烦的心情、便不得不又提起来搁下了的笔。（G）

哪怕是為了避免这种对你负疚的心情、我也必須把擱下了的筆重新拿起来。（H）

為了避免对你产生这种不愉快的心情、我也非得把擱下的筆重新拿起来不可。（Y）

これは限定語と被限定語の問題である。「あなたに対して此厭な」は述語「避ける」の目的語「心持ち」の限定語である。この場合、中国語の文章の中では、限定語のすべては述語の後ろ、目的語の前に来るべきである。しかし、古丁訳文は日本語の並び方のままである。

⑤ そう云う奥さんの唯一の誇りとも見られるお嬢さんの卒業も、間もなく来る順になっていたのです。

那般说的太太的可以看做唯一的夸耀的小姐的毕业、也不久就要轮到班儿了。(G)

因为太太的掌上明珠——小姐的毕业不久也紧接着要来了。(H) 而可以看做这个太太唯一值得夸耀的事——小姐的毕业、也不久就要轮到。(Y)

日本語にはしばしば長くて複雑な限定文が出てくるが、中国語には長い限定文が少ない。この場合、周訳のようにアレンジし直さなければならぬ。しかし、古丁訳は逐語訳で全く原文のままにされている。

⑥ 然し其先を何しようという分別は丸で起こりません。
然而将来该怎样办的处置却简直没想到。(G)

但是、我完全不知道以后该怎么办、(H)
然而以后怎么办呢？这却完全没有想到。(Y)

これも限定文の問題である。日本語の「分別」にぴたりする中国語はない。周訳には「分別」そのものが翻訳されていない。その代わりに疑問文が使われている。しかし、古丁訳は先ず「分別」を「处置」に翻訳して、また「何しよう」を「办」にした。同じ意味での重複となる。

⑦ 一度貰って仕舞へば何うか斯うか落ち付くものだ位の哲理では、承知する事が出来ない位私は熱していました。

一旦娶过来管好顾歹是会有着落的——这一类哲理并不能使我安理服那般我在热着。(G)

我当时正是热血青年、是决不会同意那种只要娶到手就总会安下心来逻辑的、(H)

我热信这种想法、到了连一旦娶到手以后迟早会安定下来的这点哲理都不知道了。(Y)

これは語彙の翻訳問題である。「熱」は中国語でも動詞として使われるが、現在進行形としては使われないし、「熱望する」も意味しない。古丁訳の「热着」は動詞「熱」の現在進行形でそもそも文

法ルール違反である。

⑧ 私はこの点に於いても充分私の我を認めています。⁽⁴⁶⁾

我既在這一點上也充分的承認着我的我。⁽⁴⁷⁾

在這一點上、我對自己知道得很清楚……⁽⁴⁸⁾

在這一點上、我也充分地认识到了我的自私。⁽⁴⁹⁾

これも語彙の問題である。日本語の「私の我」の中の「我」は、ここでは「エゴ」「意地っ張り」等の意味であるが、中国語での「我」は普通第一人称だけに使われる。中国文学の中には「自我」が確立されていないとよく言われるが、そのせいか、この場合の日本語の「我」にびったりする中国語は今もない。周訳のように「自私」「自己」とするしかないであろう。古丁は直訳主義を貫いて日本語の「我」をそのまま中国語に持ち込んだと考えられる。

このように、古丁訳は、中国語文法の述語が目的語の前に来るという大きなルールを守っているものの、ほかのルールはほとんど無視しているように見える。これは、古丁が中国語文法をくずしても原文への忠実さを徹底したためと思われる。古丁はなぜこれほど日本語の文法、日本語語彙をもち込んだのであろうか。この問題を考察する前に、古丁訳のもう一つの特徴を見てみる。

① 我读到那封信之后、本想替你觅一觅来的、至少也以为倘不写信未免失礼来的。

② 说实、我是正在烦恼着把自己怎样处才好的当儿。

③ 只是家里有着一件不老好的事。

④ 然而我却讨厌被人引诱受欺、上人家的套儿。

⑤ 甚至说道想要订的话多咎都能定。

⑥ 然而太太却说拉倒吧。

⑦ 虽是一种无聊的勾当、我却想了想这勾当。⁽⁵⁰⁾

例に引いた「…来的」「…当儿」「不老好」「上人家的套儿」「多咎」「拉倒吧」「勾当」はすべて方言か俗語である。これらのことばの使用により、「先生」の手紙の切々とした訴えが、まるで読者の耳元で囁かれているような効果を持ち、小説『心』の表現がいつも豊かになる。ところで、これらのことばはどこから来たのであろうか。『心』を翻訳するところに、古丁は小説を書き出せなくなっていたため、色々な本を耽読していた。中国の古典、特に明、清の白話小説をよく読んでいた。古丁は言語問題を論じる時『聊齋志異』の作者蒲松齡等に言及していることからそれはわかる。⁽⁵¹⁾これについて辛嘉が前出の「古丁に就いて」という文章の中で「それに支那の『才子書』から、多くの活きた語彙を取り入れ、表現力は一層強く鋭くなっている」⁽⁵²⁾と評価している。例の中の傍線部のことばは、

ほとんど明清小説から借りてきたものと思われる。明清白話小説に出てきた山東地方などの方言は、生き生きとして表現力が強い。一地方の方言とは言え、小説に書かれたことばであるため、白話小説が読まれたところならどこでも通用する。そのことばの一部分は、今でも中国人の言語生活に生きている。

古丁の翻訳は基本的に直訳である。北平時代のそれは、文章の構成に初心者らしい幼稚さ、あるいは物足りなさも感じられるが、それに対して、『心』の直訳は寧ろよく考慮した上での作業である。中国語の中に対訳語がない場合に限られているが、日本語の語彙の直接使用もしている。これは北平時代の翻訳にも見られるが、それほど多くは無かった。また、明清白話小説からの口語の借用は今まで見られなかった特徴である。では、どうして古丁はこのようなしなければならなかったのか。

ただ私の愛する漢話を、一層豊富に、一層精細且美麗にした
いからこそ、外との通路にある門を明けて、出来るだけ寛容鄭
重に彼女以外の言語を迎えたい。そして迎えた彼女の語彙ばか
りでなく、語法も語脈も吸収したい。(中略) 若し漢話の中に
溶解できないものは、自然に淘汰されその余剰のものばかりが
漢話中の話に溶解されるからだ。そうなれば、これはもう漢話
以外の言語でなく、私達の愛恋する漢話となり切っているのだ。⁽⁵³⁾

(傍線は筆者が引いた)

右は「話の話」という文章からの引用である。この中で、古丁は漢話を「豊富に精細且美麗」にするために、語彙だけでなく、語法も語脈も吸収したい、漢話に溶解できないものは自然に淘汰される、という見解を示している。似たようなことは魯迅も言った。

そうした翻訳書は、新しい内容を輸入するにとどまらず、新しい表現法をも輸入しているのです。中国の文章や言葉は、じつさい規則があまりにも粗雑すぎます。作文の秘訣は、よく使われる文字は避け、虚字は削ること、そうすればよい文章だというわけですし、講演するにしても、意思が伝わらないことがしばしばで、つまり言葉が貧しいのです。そこで、教師が教える際も、チョークの助けを借りなければなりません。こうした語法の粗雑さは思考の粗雑さを示すもので、換言すれば、頭脳がいささかぼけているのです。かりにいつまでもぼけた言葉を使っているようであれば、たとえすらすらと読めたにしても、結局のところ得られるのはやはりぼけた影でしょう。この病いを治すには、しばらく苦勞をつづけて、古いもの、よその土地のもの、外国のものなど、違った句法をつめこむしかなく、やがてそれを自分のものにすればよい、とわたしは思いま

す。

(略)

わたしはやはり直訳を主張します。わたし自身の訳し方は、たとえば、「山背後太陽落下去了」というのはこなれてはいませんが、これを「日落山陰」に改めることは、決してしません。というのは、原文では山を主としているのに、改めると太陽を主とすることによって変わってしまうからです。創作にあっても、こうした区別をつけるべきだと、わたしは思う。どんどん輸入し、どんどん消化、吸収し、使えるものを次に伝え、滓は過去に取り残されるままにしておけばよいのです。

(略)

いまはまだ口語——各地のさまざまな地方語——と一体化するわけにはいかず、ある種の特別な口語とするか、ある地方の口語に限定するほかはありません。後者は、その地方以外の読者には理解できません。広く流布させようとするれば、いきおい前者を使うことになりますが、そうなることややはり特別な口語という⁽⁵⁴⁾ことになり、文語の要素も増えてきます。

(傍線は筆者が引いた)

右の引用で議論された主な内容は二つある。一つは、中国語文章の粗雑な語法は中国人の「頭脳がいささかぼけている」ことの表れ

である。それを改善するために、中国語に新しい内容と表現法を輸入し、違った語法を詰め込む。「どんどん輸入し、どんどん消化、吸収し、使えるものを次に伝え、滓は過去に取り残される」。

古丁の直訳と漢語改造思想は、明らかに魯迅の影響を受けたと思われる。ただ、古丁の直訳は、思考回路の中で「山を主とする」か、「太陽を主とするか」の問題に止まらず、それは中国語文法を無視するほどの日本語文法の書き写しである。古丁の直訳は、魯迅の意味の直訳よりもっと徹底しており、中国語の日本語を受容する限界を試しているように見える。また、口語語彙に関しては、魯迅は「文語の要素」も取り入れるのに対して、古丁は明・清白話小説から口語の語彙を借用している。分かりやすさから言えば、古丁のほうが魯迅よりさらに進歩したといえる。引用した二人の文章には、もう一つの違いがある。それは、古丁が漢話への愛着を強調していることである。ここでは古丁の漢語に対する態度が表れている。この点については本章の(四)で考察する。

従って、古丁の『心』の翻訳については以下のようにまとめられる。

長編小説の書き方を学ぼうとして漱石の長編を翻訳した。それは原文への忠実さを徹底させた直訳で、中国語文法を無視するほど日本語文法をそのまま移植しようとするものであった。また、中国語で直訳ができない日本語のことばをそのまま中国語に持ち込んだ。

同時に、明清時代の白話小説からの口語の借用も多く見られる。このやり方は、いわば、古丁の漢語改造の一つの試みと思われる。彼は、中国語はどこまで日本語を包容することができるのか、その限界を試していたように見える。このように、古丁の『心』の翻訳には、文学技巧を追いつけると同時に、言語運用上の革新の試みも見られる。

2 『井原西鶴』

『明明』停刊後、一九三九年六月に月刊満洲社から「芸文志事務会」編の『芸文志』が創刊された。そして、一九四〇年六月の第三号は「日本紀元二千六百年記念特輯」で、中に在満日本人の小説の翻訳のほかに、森鷗外（一八六二—一九二二）や山本有三（一八八七—一九七四）等の小説や芭蕉（二六四四—一六九四）の俳句と古事記の翻訳等が発表されている。古丁の武者小路実篤著「井原西鶴」の中国語訳も載せてある。「井原西鶴」は武者小路実篤が一九三一年に書いた西鶴の伝記である。早くから古丁は「竹林七賢人の物語を書きたい」と言っていたが、なかなか書かなかった。一九四二年五月に竹林七賢人の伝記「竹林」⁽⁵⁶⁾がようやく発表された。古丁が「竹林」を書く際、その手法は「井原西鶴」を参考にしたと思われる。この意味で言えば、「井原西鶴」の翻訳は『竹林』の執筆の準備となる。

武者小路実篤の「井原西鶴」は『時事新報』に最初に発表された時、三十三章あつたが、⁽⁵⁷⁾一九三九年九月に甲鳥書林から刊行されたものは二十八章となっている。原書には本文のほかに「序」「伝記小説に就いて」「西鶴のことを一寸」もあるが、翻訳の中には本文しかない。これについて古丁はその「小記」に以下のように書く。

原書にはまた「序」「伝記小説に就いて」「西鶴のことを一寸」があるが、私は暮らしのために忙しいため、（その翻訳は）将来単行本を出す機会を待つ。（原書本还有「序」、「关于传记小说」、「稍微写一点西鹤的事情」、我因为忙着度日、只好等待将来有出单行本的机会再说了。）

つまり忙しくて翻訳が間に合わないのである。中国語版『井原西鶴』の単行本については、「新現実文芸叢書」（十二冊 新実主編 興亜雜誌社）の十二冊目として出版される予定とされていたが（辛嘉『新現実文芸叢書 草梗集』 興亜雜誌社 一九四四年四月）、実際刊行されたかどうか確認されていない。

「小記」にはまた、この伝記の翻訳経緯が書かれている。

この小説の翻訳は偶然に思いついたものだ。去年末、大連行き列車の中で一気に読み終えてすぐに翻訳しようと思った。しか

し、手をつけてみれば、一気に訳し終えることが出来なかった。引用された西鶴の文章に引っかけたのだ。(西鶴の)その文章は私の最大の敵となった。(翻譯这篇小説、是偶然想起的、去年底在去大连的车中、一气读完、就想要译出、但是一经译起、却没能一气译完、因为其中引用西鶴的原作之处、便是我的大对头。

では、この「大敵」はいかに打倒されたのか。

私は木崎龍さんに感謝しなければならない。彼の詳しい指導のおかげで、漸くこの大敵を克服した。彼は訳文の中の誤字を添削し、間違った箇所を訂正してくれた。これでどうやらその大体の意味が伝わるようになった。そのため、ところどころはわざと逐字訳を避けた。(我要感谢木崎龙先生、蒙他对我详加指教、才能把这些大对头克服了。他替我校正了书中的讹字、为我指点了好多错误、才能好歹把意思传达出来、有许多地方、我故意避免了逐字译。)

西鶴の文章は木崎龍(一九一―一九四三)の協力によって困難を乗り越え、逐語訳でない方法で翻訳した。これは『心』の翻訳とは違うやり方で、古丁の翻訳技巧の変化と思われる。では、訳文を原文と対照しながらその翻訳の仕方を検討する。

先ず小説の内容から見る。

小説の一〇八章までは西鶴が大作『好色一代男』を書くことを述べている。九〇十二章は二万句の俳諧の大矢数をやることについて書いてある。十三〇十九章は近松と対決するために書いた浄瑠璃の台本が失敗に終わってしまい、近松を認めるようになるまで。二十〇二十三章は、「芭蕉は人間世界からはなれた。だが、私は人間世界の一番キタナイ処を見て、其処でつかむものをつかもうと思っているのだ」と弟子に言い、自分と比べて芭蕉を認める。二十四〇二十八章は金銭、名誉、征服欲のためでなく、「良心」と「神経」に導かれて書くようになる。

一人の文学者が金銭、名誉、征服欲のために書くことから、「良心」と「神経」に導かれる創作へと変化する物語である。西鶴の負けず嫌いな性格と小説を書く時の孤独な内心世界がよく表現されている。この小説の中には、文学の目的、創作する時誰も理解してくれない内心の動き、ライバルとの関係、文学の最終到達目標、等の問題が提出され、それに取り組む西鶴の真剣な姿勢が示されている。また、そこから西鶴が民衆の低俗趣味に合わせず自分の心の中の芸術を追求する精神が表れる。文学の道の方向はどこに向かうべきか、そこに到達するためにいかに歩いたらいいか、等の問題は、一九三九年前後満洲文壇で頻繁に議論されていた。古丁の「方向なき方向」は本当に方向がないのか、或いは今文学の方向を模索している

ところなのか、或いは、方向はあるが明言することを避けているのか。

しかし、この小説の中の西鶴の芸術方向ははっきりしている。俳諧も浄瑠璃も書きたいが、それぞれの分野に芭蕉と近松のような超えられない大物がいるのでそれを避けて、ひたすら好色物を書く。芭蕉が俳句界で達した境地のように、西鶴も人に見捨てられても人間世界の「真心」か何かをつかもうとしている。それは西鶴の精神つまり、西鶴の文学についての「哲学」ではないであろうか。古丁が、この小説から受けた感銘、また、それを満洲文学者に翻訳紹介しようとする動機はそこにあつたかもしれない。

次は、古丁の翻訳について検討する。

この翻訳の一番著しい特徴は、その二十余りの註にある。よく見れば、これらの註の果たした役割は、①原文の引用。これは翻訳文をよく理解してもらうためである。例えば、「古潭蛙跃入、水声响静」の後ろに（註）「古池や蛙とび込む水の音」とつけてある。

②背景や知識の紹介と日本特有のことばの説明。これは註の中にいちばん多い。例えば、（註）昔男乃「伊勢物語」之首句「昔有男焉……」、概美男子之意也。③日本語の語彙の説明。原文のことばをそのまま使用して、その後ろに括弧をつけて説明する。例えば、是饥饿于真心（誠）哪、「真心」は原文で、「誠」は古丁の説明）のように分けることができる。

註をつけるのは、翻訳の内容の正しさを追求するための作業でもあり、日本の古典文化に詳しくない読者のための親切な態度でもある。この読者の立場に立つやり方は今まで古丁の翻訳の中にはあまり見られなかった。これは、『心』の翻訳に見られる言語的な実験が終わり、読者を重視するようになったことを意味しているかもしれない。

次にその「大敵」とされる西鶴の文章の翻訳について検討する。第一章で、西鶴が『好色一代男』を書く時、このような引用がある。

夕陽端山に影くらく、むかいの人来りて里に帰れば、秋の初風はげしくしめ木にあらそい、衣うつ槌の音物かしましう。はしたの女まじりに絹はりしいしを放して恋の染衣、「これは御寮人さまの不断着、此のなでしこの腰形、くちなし色のぬしや誰。」と尋ねけるに、『それは世之介のお寝巻』と答う……

その翻訳、

夕陽落山、影暗昏黄、家人来迎、世之介即同归里。秋初风劲、捣衣槌喧。亦有婢女杂聚其间、卸却扩簪、收拾染衣。問其「此乃令夫人之便衣、此梔子色之抚子花柳腰形之衣服之主人、其为

誰欤？答謂、此乃世之介之睡衣」……

また、第六章のところにもこのような引用がある。

神代このかた、又類なき御傾城の鏡、姿を見るまでもなし、髪を結ぶまでもなし、地顔素足の尋常、はずれゆたかに、ほそくなり、恰合、しとやかに、ししのつて、眼ざしぬからず、物ごしょく、はだへ雪をあらそい……名譽の、好にて、命をとる所あつて、あかず酒飲で、歌に声よく、琴の弾手、三味線は得も、一座……

訳文は、

神代以还、傾国傾城、既不整容、亦不结发、脸不敷粉、脚不修饰、体式丰细、举止娴雅、肉腴眼秀、腰肢婀娜、肌肤争雪……既佳、销魂荡魄。复能善饮、歌喉圆润、弹琴弹三味线均其拿手、待客殷勤、文章品尚……

この訳文で先ず気づくのはその文体である。この四字駢体に散文を混ぜる文体は、古丁が主張してきた新文学の散文体とは違う。この文体は、辛亥革命後の中華民国初期に流行っていたもので、当時

の小説、特に後「鴛鴦胡蝶派」と呼ばれる恋愛哀情小説にはよく使われていたものである。その代表として一九一二年上海の『民報』に連載された徐枕亜著『玉梨魂』があげられる。例えば、『玉梨魂』の第一章にはこのような文章が書いてある。

嗟嗟、匆匆短梦、催醒东风、渺渺相思、恨生南国。地老天荒、可怜人会当此日、蜂愁蝶怨、伤心者何以为情。……梦霞乃含悲带泪、招花魂而哭之曰、「冢中之花乎、三生痴梦、醒乎？否乎？汝命何短、我恨方长。香泥一掬、以安汝骨、芳草一丛、以伴汝魂、惨酒一杯、以为汝奠、凄禽一声、以为汝吊。……（ああ、束の間の夢が春風を運んできたが、お前への想いが南国に無念となつて残つた。地が老いても天が荒れても愛は変わらぬと誓いつたのに、悲惨なことにこんな今日となつてしまった。蜂も憂い蝶も怨み、私も慙愧に堪えない。……夢霞（主人公の名）は悲痛を忍んで涙を零し、花の魂に泣きながら訴える。塚の中の花よ、三世の痴夢から覚めたのか、どうか。お前の命は短く、私の恨みは残る。一握の香泥でお前の骨をやすらげ、一叢の芳草をお前の魂の伴にする。一杯の苦酒でお前を祀り、寂しい鳥の一声でお前を弔う。）

古丁は西鶴の好色物を「鴛鴦胡蝶派」の文体を借りて翻訳した。西鶴の書く放蕩する男の主人公の遊里での好色修業と、愛し合いな

がら結婚できない男女の怨恨とは違うが、二つは同じく男女の感情を描いていて、その民衆の娯楽のためという性格は変わらない。古丁のこの翻訳を読んで、西鶴のことを全く知らない読者でも、その作品は『玉梨魂』に近いと理解するであろう。この翻訳には古丁の井原西鶴に対する認識もあらわれている。

まとめてみれば、「井原西鶴」の古丁の翻訳におけるもつとも顕著な特徴は、①動機はおそらく伝記文学の書き方の勉強と、小説家西鶴の文学や性格に惹かれたためと思われる。②より正確に原文の意思を伝達するために、また、読者によく理解してもらうために、多量な注釈をつけている。これは古丁の今までの翻訳の中には見られないものである。③「井原西鶴」も基本的に直訳であるが、西鶴の原文の引用は、中国風（「鴛鴦胡蝶派」風）にアレンジしている。ここからも、古丁の態度が『心』の翻訳時に行われた中国語文法を無視するほどの漢語改造から、読者の立場を考慮するものに変わり始めたといえるであろう。

それで、「満洲国」時代第二段階の翻訳の特徴は次のようにまとめられる。第一段階にみえた左翼傾向がこの段階に来るとすっかり消えてしまい、この段階では、文学の技法を身につけるために翻訳したと思われる。『心』の翻訳では中国語の文法を無視するほどの直訳を行ったが、それは漢語改造の実験とも思われる。これには魯迅の影響もある。また、明清白話小説からの口語の借用も目立つ。

「井原西鶴」の翻訳には、『心』で見られた漢語改造の試みがなくなり、註をつけたり、訳文を中国風にアレンジしたりする努力が見られる。そのやり方には古丁の文学に対する考え方に変化が起り始めたためと思われる点があり、その変化はすなわち、古丁の文学的立場が作者・翻訳者中心から読者中心のほうへとシフトしはじめているように思われる。これは、その後の通俗文学の提唱に繋がると考えられる。

（三） 第三段階（一九四二年～一九四五年）の翻訳

第三段階の翻訳の数は少ない。大川周明著『米英東亜侵略史』、高村光太郎の詩「殲滅せんのみ」、吉川英治著「宮本武蔵」だけである。そのうち、古丁一人で翻訳したのは「殲滅せんのみ」しかない。この三つの作品はいずれも左翼傾向的なものでも、いわゆる純文学的なものでもなく、「大東亜戦争」に関係すると思われる。このようなテキストの選択は当時の社会環境に関係している。

日中戦争が全面化した一九三七年、「満洲国」國務院所屬の弘報処が設立され、出版、文芸界への統制がいつそう厳しくなった。一九四一年三月に『芸文指導要綱』が發布され、同年七月に満洲文芸家協会が設立され古丁はその委員となる。委員長は転向作家の山田清三郎（一八九六―一九八七）である。また、一九四一年十二月末に「治安維持法」が公布される。一方、一九三八年十一月近衛内閣

が日、満、華の連携による「東亜新秩序の建設」の声明を出し、一九四一年十二月八日に真珠湾攻撃で、対米英戦争を始める。一九四二年に入ると、日本軍が太平洋・東南アジアで次から次へと勝利をおさめる。一九四二年はまた「満洲国」建国十周年にあたり、その時から、「満洲国」では、一九三七年七月に始まった四年半の日中戦争は東亜新秩序建設のための戦いであり、満洲建国はアジア解放、米國打倒の準備のために行った、「民族協和」は「大東亜共栄圏」の精神であり、共栄圏ということばこそ用いていないものの、満洲建国は大東亜共栄圏の実行である、と関東軍の将校から日本文化人まで盛んに言うようになる。⁽⁵⁹⁾それによって、「大陸侵略について多くの日本人が抱いてきたモヤモヤした気分を払拭し、日本が最初から正しい道を歩んできたことを証明するかのような役割を果たしたのであり、関東軍や『満洲国』建国事業を担ってきた人びとにとっては、自分たちの努力がようやく報われたという気分にはせるものだったのである」。⁽⁶⁰⁾また、それ以前、一九四〇年六月、「満洲国」皇帝溥儀が日本を訪問し、日本皇室から三種の神器を持ち帰り、「建国神廟」を建てて、天照大神を拝むようになった。「満洲国」建国十周年には、「太平洋戦争のただなかで、戦争指導のスローガンに押し出されていた大東亜共栄圏確立のための、その既成の一翼として満洲国を誇示するため」⁽⁶¹⁾に、日本と関内を含め、各地の有名な芸能人を「満洲国」の都新京に呼び込み、「満洲国」政府は大々的に

その慶祝気分をあおり立て、「民族協和」の成功を内外に示した。満洲文芸家協会は『建国十周年慶祝詞華集』を編集し、山田清三郎編『建国列伝』が『満洲新聞』で連載されはじめる。

一九四三年に入ると文芸家協会が改組され、大東亜連絡部が新設され、古丁はその部長となる。古丁が上記の三作を翻訳したのは、このような社会風潮の中でのことであった。

1 『米英東亜侵略史』

『米英東亜侵略史』は、大川周明が一九四一年十二月十四日から同二十五日までの十二日間に行ったラジオ放送の速記に加筆したもので、一九四二年一月、第一書房から初版二万部、刊行された。その目的は序に書かれているように「主として米英両国の決して日本及び東亜と並び存すべからざる理由を明らかにするためである。その内容は「米國東亜侵略史」と「英國東亜侵略史」の二つの部分に分けてある。米國のアジア侵略は主にペリー来航から、満洲鉄道等満蒙の權益を巡る日本との争奪についてであるが、英國のアジア侵略はインドの植民地化とアヘンの中国への輸出について書かれている。最後に、日本の中国に対する思いが述べてある。

日本が支那の領土保全を不動の国是として来たのは、其の奥深き根底を、日本人の真心に有しております。(中略)それ故に

何はともあれ、黄河、揚子江の流域が他国の手に奪われるに忍びない、飽くまでも之を漢民族の手に保存させて置きたいというのが、自ずと湧き上がる日本民族の赤誠であります。(中略)王精衛氏以下の諸君は、興亜の戦に於いて我らと異体同心になつておりますが、支那国民の多数は其の心の底に於て尚お蔭政権を指導者と仰ぎ、日本の真意を覚らんとせず、却つて日本に反抗しつつあることは、悲痛無限に存じます。さりながら明治維新を顧みましても、各藩に勤皇佐幕の対立抗争あり、勤皇諸藩の間に反目嫉視あり、最後に薩長相結んで幕府を倒すに至るまで、如何に多くの高貴なる鮮血が流されたかを思えば、これ亦止むなき次第であります。⁽⁶²⁾

アジア主義者大川周明は、この本の中で、米英は如何にアジアを侵略し、日本は如何にアジアを解放しようとしているか、蒋介石は如何に日本の赤誠を知らず米国の援助で抗日戦争に迷走しているかを説き、そのため、対中戦争には明治維新の如く「高貴なる鮮血が流され」ることはやむをえない、と述べている。つまりアジアを、日本をリーダーとする一つの国のように考え、対中戦争を明治維新に喩え、対米英戦争、対中侵略戦争を合理化するものである。

大川周明はこの本で日本国内を巡回講演し、対米英戦争の熱狂の渦の中に迎えられた。その単行本が出版されてから僅か三ヶ月後の

一九四二年四月に、芸文書房からその漢語訳が「満洲国」の読者の前に届いた。この本は、一九四四年十二月まで、初版二回、再版二回、三版も二回と度重ねて印刷され、これまでの古丁の翻訳の中では、いちばん売れたものとなる。この本の読者はそれぞれいかなる心情でそれを読んだか分からないが、当時「満洲国」で対米英戦争への関心が高まっていたことは事実であった。

対米英戦争が始まってから、「大東亜共栄圏」内の北平、上海各地の芸文界で、民衆と兵士の「鬼畜米英」に対する敵愾心を鼓舞するために米英のアジア侵略の罪惡を暴露する宣伝が盛んに行われている。禁煙英雄林則徐に関する映画の上映、劇団の巡回公演とともに、『英米罪惡史』のような本の編輯出版も行われる。大東亜共栄圏建設の先駆けと自負している「満洲国」でも盛んに行われていた。そして、これらの対米英戦争を宣伝する本の翻訳出版の責務は、言うまでもなく文芸家協会会員、満系作家の代表、満系出版社芸文書房の社長としての古丁の肩にかかってくる。古丁がやりたいかやりたくないかにかかわらず、この翻訳は急いでやらなければならなかったに違いない。翻訳者に芸文志派の主要メンバー爵青(一九一七—一九六二)と外文が名を連ねていることも、それを語っていよう。この本の翻訳も直訳の方法を取っており、初めから終わりまで作者大川周明の意思に忠実に訳している。この直訳の方法は今までの古丁の翻訳と同じである。ただ、違うのは、この本の前にも後ろに

も翻訳経緯等を記した「前書き」や「訳後小記」、つまり翻訳者のことが掲載されていないことである。ただし、本の最後に「新嘉坡陥落之夜訳竟」の一文が加えられている。シンガポール陥落によって日本はマラッカ海峡の主導権を握ったことを記している。

『米英東亜侵略史』の翻訳者は古丁だけではないが、最後の仕上げは責任者の古丁であり、「新嘉坡陥落之夜訳竟」の一文は古丁が書いたものと思われる。果たして翻訳者はその勝利を祝うためにその一文をつけたのであろうか。

実は、シンガポール陥落の日の一九四二年二月十五日の夜に、古丁は新京の最高級のレストラン「香蘭」で日本人作家林房雄と対談していた。二人の対談の記事は、四月号の『芸文』⁽⁶³⁾に載った。対談の内容は「大東亜戦争の構想」「満洲文化の転換期」「漢民族を認識せよ」「郁々たる日本文化」「硬派文学への提唱」「語系と民族の問題」「一流の憂国者たれ」と小さな項目に分けてある。林房雄の発言は「満洲事変の時に既に日本側の指導者には大東亜戦争の構想があつたんですね」と述べているような「新発見」から、「満洲の魯迅になれよ」⁽⁶⁴⁾というような古丁個人に対する要請にまで及ぶ。この対談の中では、太平洋戦争緒戦での勝利で興奮した林房雄と、林の矢継ぎ早の質問に慎重にことばを選びながら答える古丁の態度とが対照的である。例えば、

事（満洲建国）に携わった中心人物は欧米勢力、特にその最後のな力としての米国の打倒によるアジアの解放を目標とし、米
国と闘う準備の下に満洲建国に臨むと云う事をはっきり言っ
てあるですよ。現在では大東亜戦争も幸いに勃発した。これは
満洲建国の最初の理想であり最後の結論でもあります。

と、林は見解を述べ、そして、

これは是非（満人に）しらせなければならぬですよ。最初から
知って居たらどうだったろう。

と質問する。

知って居たら今迄の満系官吏は、今迄以上に働ける様になる
のではないかと思います。目的がはっきり示されて、それに向
かってはつきりした目標がある訳ですからね。⁽⁶⁵⁾

と古丁が答える。この対談は、日本人作家が一方的に質問し、「満人」作家がひたすら答える、という日満作家交流のいつものパターンで行われているが、その問答には「満洲国」建国に対する日本人作家と「満人」作家の態度の違いが出ている。古丁は満洲建国の最

初の思想がそのように掲げられていたわけではないことを逆にはつきりさせているようにも読める。

また、対米英戦争の始まりは、「満洲国」在住日本人の文化人にとって「自分たちの努力がようやく報われたという気分」にさせる」ものであったかもしれないが、「満人」は、必ずしも日本人と同じ視線で見ているわけではなく、その思いはもっと複雑である。彼らが米英を相手に戦争の勝利を収めつつある日本にびくくりしたのは事実であるが、長期戦も予想している。例えば、満洲芸文聯盟の機関誌『芸文』（一九四二年三月号）に解半知の「第一建国より第二建国へ」⁽⁶⁶⁾という文章が載せてある。その中で、「戦争は剛開始した許りであるが、我々^{われわれ}その長期化を想せねばならぬし、又其の為めの準備をせねばならぬ」（ルビ原文どおり）と言い、シンガポール陥落の勝利は戦争の始まりで、これからの長期戦のために準備しなければならぬと、冷静に戦況を見ている。また、解半知は続けて言う。「我々^{われわれ}は建国以来十年、色々の試練を経たが始終共同敵人に逢着せず患難を共にする機会を有たなかったため、我々各民族は未だ真々に協和しなかつたのだ」と鋭く指摘してから「我々^{われわれ}は『打开窗户说亮话』を以て十周年慶祝、第二建国の口号としたら好^{どう}不好^ず？」と、「満人」に意見なり、要求なりを言おうと呼びかけ、この契機によって日本人と「満人」との真の民族協和を図ろうとしている。つまり、この文章は、満系も日系も力合わせて戦争の勝利

のために頑張ろうとも呼びかけるものであるが、いちばん訴えたいポイントは「真の協和」である。

この解半知という筆名を用いているのが、古丁である可能性が高い。解半知は、満洲文芸家協会のメンバーであること、漢語の俗語に詳しい、つまり満系であること、日系と満系両方の思いに詳しいこと、言語に関心を持ち、特に漢語の漢字に日本語の意味のルビを振っていることなどから考えれば、古丁ほどふさわしい人がいないように思われる。また、かつて『一知半解集』（一九三八年）というエッセイ集を出したことから、「解半知」なら古丁が採用しそうなペンネームとも思われる。いずれにしても、多くの日系は「大東亜共栄圏」の中の満洲建国の合理性を見つけ「報われたように」思っているのに対して、満系はこれから何が起こるか冷静に目を見開いている。（解半知の戦況に対する見方は、一九四二年二月号の『麒麟』に載った文章「解半知先生一夕談話記」を参考にもできる。）また、解半知には、これを契機に、「満人」が積極的に発言して日本民族と対等になり、真の「民族協和」を実現しようという希望を持つている。これらのことばから、古丁の一貫した「満人」の民度を高めようとする意欲が読み取れると同時に、彼の民族対等の要求もうかがえる。

シンガポール陥落の夜、林房雄と対談してから帰宅した古丁は、いろいろなことを考えながら『米英東亜侵略史』の翻訳作業を続け

たと思われる。そして終わってから「新嘉坡陥落之夜詠竟」を記した。実は、「陥落」ということばの意味は中国語と日本語とは微妙に違う。中国語では、「淪陷」ということばもあるように、普通、領土が敵に占領されて失われることを「陥落」と言う。この意味で使ったなら、古丁はイギリス側の立場に立ち、シンガポールを失うことを惜しむことになる。または、イギリスの味方までにならず、ただ日本がそれほど強くなることを望んでいない、それへの対処に困っている、とも考えられる。ただ、当時日本語新聞を始め各新聞に「新嘉坡陥落」と書かれているから、古丁もそれに従う可能性がある。ゆえに、彼は中国語の意味で使ったとは言いい切れない。一方、もし、古丁はシンガポール陥落を喜んで勝利として祝おうとすれば、何故その気持ちをいつものように「前書き」か「訳後小記」の中で表さないのか。つまり、「新嘉坡陥落之夜詠竟」という一言しか記していない古丁には、シンガポールでの日本の戦勝を祝おうとする気持ちまではなかった。この一言は、「満人」としての古丁のこの戦争に対する複雑な心境を表していて、『米英東亜侵略史』は自分から進んで翻訳したのではないと語っている、と考えられる。古丁はこのような複雑な心境を抱えたまま対米英戦争の流れに乗ってしまっただと思われる。

2 「殲滅せんのみ」

一九四三年五月に文芸家協会が改組され、大東亜連絡部を新しく設け、古丁はその部長に就任する。十一月に文芸家協会の機関誌として中国語雑誌『芸文志』が漸く芸文書房から創刊される。そして、一九四四年五月に刊行された第七号は「奏凱歌而後已」（凱歌を奏するまで）という詩歌特輯号である。この特集の「言公」という欄に「我々の片言も思想戦と神経戦の弾丸に成らなければならない。作家はすなわち思想戦と神経戦の戦士である」と書いてあり、この特集の性格を表している。文芸家もまた武装しなければならない。では、どのように武装するのか。

一 大敵愾心を昂揚する。一 必勝の信念を起こす。一 敵の謀略を破る。一 民族協和を徹底する。一 大東亜共同宣言を闡明する。一 増産、勤労、貯蓄するように国民道徳を昂揚させる。一 民衆防衛を徹底する。一 同盟国の紹介——これらの課題、我々の主張はすべて作家それぞれの筆によって描き出してもらわなければならない。

という。

この特輯号に「必勝吟」「詩人評伝」「詩作」「ドイツ戦争詩抄」「詩劇」等の欄が設けられている。「詩作」欄は創作詩で、中に成絃

（生没年不明）の「国土頌」、石軍（生没年不明）の「過渤海国宮殿」（渤海国の宮殿を通る）、冷歌（生没年不明）の「松花江」が掲載されている。この三つの詩はどれも満洲の土地を詠うもので、露骨な戦争スローガンのような文句はほとんど出ていない。「詩人評伝」欄は「愛国詩人」と評されてきた「屈原」のことが書かれている。

「詩劇」欄は「大地の女兒」（大地の娘）という詩で書かれた脚本で、都市で放浪していた青年が田舎の親と恋人の元に戻る、という物語である。そのほかに、「東亜的古詩源」「詩話」など詩に関する文章が載っている。これらの欄の作品は対米英戦争にまつた関係がないか、それほど関係がないと思われるものである。そのサブタイトル「奏凱歌而後已」の「戦争勝利まで戦う」という意に添ったのは、「必勝吟」欄と「ドイツ戦争詩抄」欄である。

「必勝吟」欄に掲載されたのは小松の「鉾山行き」、春明の「開拓村」と甘川の「民防衛」で、いずれも戦時情況に緊密に繋がっている。これらの詩の前には日本人の詩人江口隼人（一九〇五—）の「躍起・青年アジア」、西條八十（一八九二—一九七〇）の「国民総意の歌」、武富邦茂（生没年不明）の「太平洋を守る」、と高村光太郎の訳詩が掲載されている。このうち「殲滅せんのみ」はいちばん先頭に掲げられており古丁の訳である。

石川啄木著『悲しき玩具』を翻訳することによって、「詩の翻訳はほとんど不可能」であると感嘆した古丁は、他の詩作をほとんど

翻訳していない。高村光太郎のこの詩は彼の二度目の詩の翻訳となる。

高村光太郎のこの詩は、一九四三年三月の『中央公論』に最初に発表されたが、一九四四年詩集『記録』に収録される。その時前書きが付けられ、中に「ガダルカナル島の米兵わが兵を猿とよび残虐驚くべく、聞く者憤懣せざるはない。一月九日中華民国国民政府対米英宣戦布告、日華共同宣言発表⁶⁷」など詩が書かれた時の社会背景が記されている。訳詩の中にはこれらの記述が入っていない。

詩全体は十九句で、「軽蔑するものは軽蔑せられる」で始まり、「幾千年の歴史今日に集中し、神よびたまひ、われら答え、猛然たる鬱勃の気 今やただ彼等を圧倒せんのみ」で結ぶ。我々の「神の兵」は「野獣」の「鬼畜米英」を殲滅しようという主旨の作品である。戦時中活躍していた高名な詩人高村光太郎の詩は、この特輯号を代表するものといえる。

満洲芸文聯盟の機関誌とは言うものの、一九四四年五月『芸文志』は、第七号が「出版用紙を節約するために」分量を百二十頁に減少しなければならなくなっていた。この「編後」にあたる「小大由之」の中の一言から当時雑誌の経営の難しさが読み取れる。実は満語『芸文志』（一九四三年十一月創刊）は、そもそも紙の問題等で日本語版機関誌『芸文』よりずっと遅れて創刊された。一九四四年五月の時点になると、『芸文』と比べると、『芸文志』には出版用

紙だけではなく、創作が少なくなり執筆者が足りなくなる問題もある。それは日本の敗色が濃くなり、対米英戦争を謳う「満人」作者が少なくなっているためと思われる。しかし、「満洲国」が続いている限り、満洲芸文聯盟の機関誌としての『芸文志』は継続させなければならぬ。責任者として古丁は途中でやめてはならない。その理由としていくつかのことが考えられる。一つは、杜白雨が言ったように、戦争の状況が悪ければ悪いほど、憲兵、特務の監視が厳しくなる。それは日本の敗戦にそなえて、反日活動が活発になるのを抑えるためである。ゆえに文化人はますます不自由になり、古丁には別の選択肢がなかったと⁽⁶⁸⁾考えられる。もう一つは、先に述べたように第七号の内容には、戦争関係以外の作品も掲載されていた。それは主な中国語雑誌として「満洲国」の「満人」の読書生活に役立つと考えられる。その意味でもこの時期の『芸文志』の存続が必要となる。それゆえ、「詩歌特集」を打ち出し、その中に高村光太郎作「殲滅せんのみ」を翻訳するという古丁の苦心が見えてくる。

3 「宮本武蔵」

一九四四年十月に『芸文志』第十二号が刊行される。これは一九三九年六月創刊の芸文志事務会編の雑誌とは同じ名称を使っているから前の『芸文志』の引き継いだものとも思われるが、それにはそれなりの理由がある。前者は満日文化協会とのかかわりがあるが、

発行所は芸文志事務会となっていて基本的に同人誌の性格を持っていた。後者は満洲芸文聯盟の満語機関誌として出版され、「満洲国」国策を宣伝する戦時下の文芸雑誌である。しかし、誌名も同じであるし、関わっている人もいっしょで、責任者も同じ古丁である。

『芸文志』の創刊号の編輯後記は、雑誌の内容について、以下のように述べている。①文芸作品のほかに学芸論文も掲載する（文芸作品之外、我们计划添进一些学艺的论文。内容は文芸理論に限らず、芸文各分野に関するものなら採用する。②毎号に日本文学の名作を翻訳紹介する（其次、我们想在这里每期介绍一篇日本文学的名作）。つまり前の『芸文志』と同じように創作をしたり翻訳したりする方向にむかう。

翻訳された日本文学作品として、第一号に芥川龍之介著「地獄変」、第二号に芥川龍之介著「芋粥」、第三号には森鷗外著「山椒太夫」が続く。そして、第十号（一九四四年八月）に載ったのは吉川英治著「宮本武蔵」である。その翻訳者には古丁と爵青と二人の名前が並んでいる。

なぜ「宮本武蔵」を翻訳したのか。『米英東亜侵略史』と同じように、それを説明する前書きも訳後小記もついていない。また、この期の編輯後記に当たる「小大由之」の中には、本集の他の作品についてはほとんど触れているが、「宮本武蔵」については何も記載されていない。この「小大由之」は古丁自らの執筆で、わざと「宮

本武蔵」についての言及を避けたのではないかと思われる。その無言は何を語っているのだろうか。

ところが、次号十一号（一九四四年九月刊行）には爵青と田郷の対談「談小説」（小説を論じる）が掲載されており、その中で爵青が翻訳者の一人として「宮本武蔵」の翻訳について語っている。

まず、翻訳者は二人になっているが、実はその時、爵青が病気がかかっており、あまり仕事が出来なかった。そのほとんどは古丁が翻訳したという。

また、「宮本武蔵」を翻訳した理由として爵青は主に次の三点を述べている。①今まで日本の純文学を翻訳紹介してきたが、それは一部の文学青年にしか読まれていなくて、一般民衆にはなかなか受け入れられなかった。しかし、「満洲国」には日本文学を吸収する義務がある。それで純文学の代わりに大衆文学を翻訳しようと思った。②宮本武蔵は一剣客であるが、その剣術の中には日本の武士道精神がこめられていて、日本の国民的英雄である。「満洲国」は親国日本と一体同心であるため、日本の国民的英雄はすなわち満洲の国民的英雄である。③日本の歴史を理解してもらうため。日本の歴史を紹介する本はたいてい理論的で難解なものが多いが、「宮本武蔵」の中には徳川幕府時代の背景知識がたくさん書かれていて、それは簡単で分かりやすい、という。

以上三点は、戦時下の「日満一体同心」の「満洲国」では、とて

も立派な理由になっている。古丁にとっては、特にその①大衆文学への切り替えは確かである。

前の「井原西鶴」の翻訳を論じた時、一九四〇年ころの古丁の文学態度の作者・翻訳者中心から読者中心への変化を確認してきた。ここで古丁の創作態度の変化について少し触れておく。

満洲文壇に登場してから間もない古丁は、「評『紅樓夢別本』」等の文章を書き、新文学と文壇を争奪するいわゆる「鴛鴦胡蝶派」等通俗小説を厳しく批判していた。また、彼は「人に好感と美感を起すもの、何を言っているかわからないもの、人を樂觀させるものを書かない」（不写让人读了起好感或美感的東西、不写让人读了莫名其妙東西、不写让人读了东观的东西⁽⁶⁾）という創作信条を守った。しかし、一九四三年九月の『青年文化』に、「文芸の実用性はもちろん必要だが、いちばん肝心なのは面白さだ」（文艺之有用固然也需要、而最要紧的、却是有趣）、「世界でいちばん偉大な作品は、往々にしていちばん通俗な作品である、なぜなら、いい作品にはたくさん読者がいるからだ」（世界上最伟大的作品、往往是最通俗的作品、是因为好的作品、差不多要有多的读者的缘故⁽⁷⁾）と言い、民衆が読んでくれそうな作品を書き、民衆に読書生活を促すことを主張し、中国語での通俗文芸を提唱した。ゆえに、この視点から大衆文学『宮本武蔵』を翻訳する可能性が十分考えられる。

爵青の話によれば、長編小説『宮本武蔵』はすべて翻訳されたよ

うであるが、『芸文志』という雑誌にはもちろんその全編を掲載することが出来ない。発表されたのは、『宮本武蔵』のごく一部、「水の巻・優曇華」(二・四)だけである。この部分は、四条道場の開祖吉岡家が田舎ものの宮本武蔵の挑戦を受け、対決して負けてしまったところから、吉岡清十郎が武蔵への対応に悩み、古参の門人に武蔵をだまし討ちにさせようと決めるところで終わる。これだけの内容では、宮本武蔵の国民的英雄ぶり、武士道精神等は、はつきり出ていないし、日本歴史の記述もそれほど多くはない。爵青が言った「日本国民英雄の回顧」と「日本歴史の理解」という二つの目的はなかなか達成できないと思われる。そもそも『宮本武蔵』を翻訳した動機は爵青の言ったとおりかもしれないが、それは、『芸文志』に載せる時、どの部分を選んで発表するか基準にはならなかった。つまり、古丁がこの部分だけの内容を選んで発表する理由は別にありと考えられる。では、その理由は何なのか。

掲載された部分の内容は、四条道場を創った兵法名譽の家門で、その宏壮な邸も弟子の数も日本一の京都において随一と言われる吉岡家が、侮辱を受けた。田舎者の挑戦者宮本武蔵に負けてしまい弟子六名が重傷を負い、そのうち二人が死んだのである。挑戦者の相手の宮本武蔵はいかなる人物か。また、吉岡家はいかなるものか。

宮本武蔵は作州吉野郷宮本村の牢人で、父や村に来る兵法者、また樹木や山霊に習う武者修業の、間抜けに見える若者である。彼はま

だこれという師もなく流派もないのに、将来吉岡流の一派をなした拳法先生の如く宮本流を創りたいという志の持ち主として登場する。

一方、負けてしまった吉岡家は、先代の吉岡拳法は偉い人で、彼は吉岡流小太刀を創り四条道場を開いた。その人間と徳望は今の弟子門人にも慕われていた。しかし、「塀の内の人間が誇ったり、慢じ合ったり、享樂したりしている数年の間に、思い半ばにすぎような推移をとげていた」⁽¹⁾。若先生の清十郎は父親の死後、修業を怠って、武蔵による侮辱を受けた当日は芸者遊びで外泊していた。帰ってきた清十郎は武蔵と対決しようとするが、無名の牢人宮本武蔵とは言え、既に弟子に数名の死者が出た。清十郎の敗北を危惧する古参の門人が武蔵を騙し打ちにすることを決めた。それを聞いて、清十郎は面は堪えがたい辱めをうけて汚れたが、内心では修業の怠りを省みる暗い気持ちであった。

以上が『芸文志』に発表されたすべての内容である。先代開祖の人間のすばらしさで徳望と名声を手に入れた吉岡家であるが、子孫の墮落と無能さにより衰弱していく。一方、田舎出身で無名でありながら自らの努力によって力強くなり、旧家に挑み、それを破った武蔵がいる。このような墮落して衰退していく旧家と自ら努力して強くなる新人の対照は、五千年の文明を誇りながら列強の餌食になってしまった中国と、遠い海のかたの島国にもかかわらず明治維新を通じて自ら強くなった日本とを対比する構図のように思われる。

この一段の中では、吉岡家の挑戦者武蔵に対する傲慢な態度、負けた後の門人たちの反応、清十郎の外剛内弱な性格等が詳しく書かれている。それはアヘン戦争以降列強にやられっぱなしの中国の中で一部の人の墮落ぶりと重なる。そのところが古丁が読者に示したかったものではないであろうか。

「満洲国」の民度は古丁が関心を持つ問題の一つである。一九四〇年の秋、新京で流行したペストのため、古丁一家は一ヶ月近くの病院隔離生活を強いられた。隔離病院の中で彼は日系と比較しながら、満系民衆の民度の低さに驚き、民衆を啓蒙して、その民度を高めることの必要性を痛感した。⁽⁷²⁾それで、彼は通俗文学の提唱を含めて、この問題の解決策を模索していた。この模索は『芸文志』の中で農村、鉱山、鉄道で働いている人の詩を募集したことも繋がるし（勿論これらの詩の掲載は大東亜戦争の弾丸の役割を果たすことを第一の目的としているが）、戦後古丁脚本の編集活動（中華人民共和国成立後、古丁は評劇劇団に入り、農村を題材にした脚本を多く集めて編集した）にも繋がると思われる。今でも中国政府を困らせている農村の教育問題からみれば、この問題に対する古丁の先見の明は認められなければならない。

このように、古丁が吉川英治著『宮本武蔵』を翻訳した理由として、爵青が語ったように日本の国民的英雄を回顧し、日本の歴史を知ってもらう面もあるかもしれないが、実際雑誌に抜き出され、発

表されたものには、中国の墮落と後れ、民度の低さに対する古丁の一貫した批判がうかがえる。

第三段階での古丁の翻訳についてまとめる。第三段階では、大川周明著『米英東亜侵略史』、高村光太郎著『殲滅せんのみ』、吉川英治著『宮本武蔵』を翻訳した。これらは、いずれもいわゆる「大東亜戦争」に協力すると思われるものである。そこから満洲国文芸家協会の一会員として「満人」作家代表としての古丁の時局の流れに乗る姿勢が見える。ただ、これらの翻訳の内容を詳しく検証してみれば、古丁の「大東亜戦争」の熱狂の潮流に流されながら、冷静に戦争の行方と時局の発展に目を見開き、終始満系民衆の民度を問題にしている、という姿勢が見えてくる。

(四) 言語の問題から見た古丁の翻訳

古丁の翻訳の理由として、岡田英樹は「文学の質を向上させる」ことと「漢語（中国語）を近代語として成熟させる」ことの二つを指摘した。⁽⁷³⁾それはこれまでの考察からも、その通りであるとうなずけるものである。しかし、さらに、古丁の翻訳を「満洲国」の言語問題において考察してみれば、また別の一面がみえてくるのではないかと思われる。

日本は植民地の台湾と朝鮮では、一九三七年から「皇民化政策」を実施し、領土内で国語として日本語の教育を強制する。「満洲国」

は、表面的に独立した国家の形が取られているので、終始「民族協和」をスローガンとして掲げ、台湾や朝鮮と同じ政策を押し通したわけではない。「満洲国」は一九三七年五月に「勅令」により「学制改正令」や「学制要綱」等学校令を公布し、一九三八年から日本語を「国語の一つ」として国民学校等で教授する。清朝以来の蒙古等少数民族居住区では、国語としては中国語が教えられていたが、これらの学校令によって、これらの地区で次第に中国語をやめて日本語を教えるようになる。⁽⁷⁴⁾事実上、日本語は各民族の共通語となり、その第一国語の地位が確定されている。

一九三九年九月、民生部、建国大学、満日文化協会の発起によって満洲国語研究会が設立される。この会の目的は二つある。一つは「国語」の研究、つまり日本語と「満語」の標準語の語彙の整理、発音の統一、外来語の制限や統制等々を調査して研究することで、もう一つは「国語」の普及である。主に日本語の普及に力を入れている。「満洲国」には二千万人以上の「満人」がいて、その大部分は農村に分散している。都市部の子供なら学校で日本語教育を受けることが出来るが、農村部には学校が少ないので、日本語教育が問題となる。農村の人たちに何らかの形で日本語に触れさせようと色々な考案がなされている。

「満語」つまり中国語の発音の表示法については、中華民国では注音符号を使っていた（台湾では現在も使われている）。「満洲国」で

も、一九三八年までは注音符号が使われていたようであったが、それ以後、廃止されて、学校の教科書においては日本語のカナに切り替えた。また、満洲帝国民生部国語調査委員会が注音符号の代わりに日本語のカナで「満語」の発音を表示することがどこまで可能なのか、について調査していた。そして、一九四一年十月に注音符号の使用が禁止され、さらに、一九四四年文教部から「満語カナ」が公布された。「満語カナ」とは、中国語の発音を表す日本語のカタカナである。例えば「満洲帝国」(man zhou di guo) はマヌ デオウ デイー グラ(その上に四声を示す印がつく)と読まれるようになる。⁽⁷⁵⁾「満語カナ」を使用することによって日本語を普及させようとする「満洲国」政府の思惑が込められている。

このような一連の動きに対して、「満人」はどのように考えていたのか、ここで古丁の態度について考察する。古丁の言語に対する態度は、夏目漱石の『心』の翻訳に見られるように、日本語文法の取入れと日本語語彙の借用を積極的に行った。しかし、そこに止まっていたわけではない。

1 言語に対する態度

①作家は母国語で創作するべき

満洲国語研究会は『満洲国語』という雑誌の満語版と日本語版を発行する。その満語版（一九四〇年六月～一九四一年三月、全八号）

の編集者は陳松齡（辛嘉）で、古丁のグループの一人である。その内容を見れば、専門論文「方塊字与文化」、「方塊字改革談」等もあるが、日本語講座、検定試験の問題と合格者一覧表がその主な内容を占めている。全体的に「満語」専門家が少なく、その調査・研究に関する論文らしいものが少ないという印象を受ける。第三号（一九四〇年八月発行）の史立文「方塊字改革談」では、漢字の注音の模索の歴史を辿っている。「わが国の新字運動史は決して日本より遅れているわけではない。明万暦年間、欧系人利瑪竇（Matteo Ricci 1552-1610）がローマ字を使って漢字の発音を表示したことがある」と回顧してから、民国七年（一九一八年）教育部が注音字母を發布したと、注音符号の成立の経緯を紹介した。

史立文のこの文章の前に古丁の「話的話」が載せてある。この文章の日本語バージョン「話の話」は『満洲国語』日本語版第五号（一九四〇年九月発行）に掲載された。

この文章の内容は『心』の翻訳を検討する時も触れたが、古丁は最初に「漢話」に対する感情を訴えている。「勤務中に『漢話』の話をすることが非常に少なく、求智的には退庁してからも『漢話』を読む時間が少ない」ので、『漢話』に侘しい郷愁を感じる⁽⁷⁷⁾。なぜなら、「私は『漢話』を離れては無一文になる文学者だからだ」「私の詩も漢話の中にある」。しかし、古丁は日本の文化人、特に「内地」から来た作家に、日本語で書かないのかとよく聞かれる。

「最近時々私達に対して呼びかけられる言葉を聴く、それは日本語で書けという註文である」。古丁はその呼びかけに反対する態度のほうに共鳴を覚える。なぜなら、「私は言語技師だと認識している。その技師は自己の母国語さへ創造出来ないのだから外国語で何が創造できよう」と思うからである。

古丁は、自分の詩が漢話にあると言い、漢話で創作することを主張する。実は、日本人作家の中にもその主張を支持する人もいる。一九四〇年「満洲国」の使節として日本紀元二千六百年の記念式典に参列することを契機に、古丁は『文学界』の第七卷第四号（一九四〇年四月）に「満洲文学通信」という文章を寄稿した。その中に「ことばに関する問題に就て島木健作氏、小林秀雄氏が満洲語で書くのが当然であると言われ、林房雄氏は五十年後は日本語で読み書きをするであろうと言われた⁽⁷⁸⁾」と書いてある。古丁が共感を覚えるのは、島木健作（一九〇三—一九四五）や小林秀雄（一九〇二—一九八三）等の意見である。古丁は日本語で書けと呼びかけた人を「ジャーナリスト的文豪」とし、それに対しては「ただ隨機応変文化の刺激を追求するを知るだけで、どうして文化建設に参加すべきかを決して知らない。若し根本から文化建設の意欲が無ければ又自ら別論すべきである」と鋭く批判している⁽⁷⁹⁾。満洲芸文聯盟の機関誌『芸文』の一九四三年八月号に、「小林秀雄を囲む」という座談会が載っており、「満人」作家側に古丁と爵青が出席していた。この中で

小林が「僕はジャーナリズムから遠ざかった」と発言する。⁽⁸⁰⁾古丁のこの「ジャーナリスト的文豪」に対する批判も小林秀雄と一致している。このように、古丁は日本語でエッセイを書くが（『朝日新聞』『文藝春秋』『芸文』『満洲国語』日本語版への寄稿）、小説などの創作は漢語でなければならないという態度を守っている。他の日本人作家との対談の中にもその態度を表している。⁽⁸¹⁾

② 文学者は言語の探検をしている

「話の話」で、古丁は、言語の技師である文学者は「話」を発掘し、彫塑し、描写し、弾奏している。小松の感覚の探検が語脈を豊富にし、爵青の文章の探検が語法を精密にする。また、石軍の聴覚の探検が語彙を活発にする、と言う。しかし、漢字自身に欠点があり、「漢字はもう私達の文学的表現を十分に満足せしめることが出来なくなつた」とも言っている。そして、古丁は、山東訛りで書かれた蒲松齡の鬼狐伝や「金瓶梅詞話」に登場した音を表す漢字（擬音語）を例に、漢字で音を表す場合その読み方を表す注音符号がないと意味がないと言い、注音符号の必要性を訴える。また、注音符号はカナより優れていると、長谷川如是閑（一八七五—一九六九）等の文章を引用して説明する。六朝を訪れた日本の留学僧が漢字から仮名を作り、その仮名は又中国に逆流入して注音符号となる。「併し、『拼音』上では『注音符号』は『カナ』に勝っている」と長谷

川の意見を述べる。「『カナ』を漢音の音標としてもかならずしも日本語の普及を成しとげることが出来ない」と、「満語カナ」のような動きに反対する。「話の話」は一九四〇年九月に書かれたもので、その一年後に注音符号は禁止される。

実は古丁が注音符号に関心を持ち始めたのは一九三八年で、ちょうど新学制が実施される年である。その時、古丁は史之子の筆名で『月刊満洲』に「注音符号のこと」という文章を発表した。この文章によれば、一九三八年に注音符号はすでに廃止された。「教科書を見ると確かに見当たらない。何でも仮名で置き換えるそうだ」。⁽⁸²⁾古丁は「私は注音符号というものには原来、愛も憎しみもない。私は寧ろ漢字廃止論者に好感を持つている方だ。だが、廃止しない以上は、矢張り幾千年の歴史を辿つて来た注音符号で、漢字の音を表した方が無難である」⁽⁸³⁾と述べている。また、この文章から、古丁の注音符号に関する知識はほとんど黎錦熙（一八九〇—一九七八）の『国語運動史』（一九三五年）から得たと分かる。

廃止から禁止、注音符号はすっかり「満洲国」から姿を消したのである。しかし、古丁はまだあきらめない。『芸文志』第五号（一九四四年二月発行）「翻訳特集」の「思無邪」欄の中で、古丁は「注音符号の問題（注音の問題）」という短文を発表する。この中で、「もちろん、『注音符号』も漢字を置き替える可能性はあるが、それより、その表音における役割が大きい」（固然、注音符号也有代替漢字的企

图、还是在注音方面所收的实效较为巨大)。表音には、注音符号はカナより優れているにもかかわらず、「近来、『カナ』で漢字の音を表すことについては調査されてきたが、注音符号の欠点については何も指摘されていない。これは明らかに『拼音』から『読若法』へ歴史的に逆戻りしている」(近来、较以假名标音汉字、进行调查、但并没有对于注音符号的缺点加以人和指摘。这显然是由拼音复归到读若法)と指摘する。「大東亜宣言には各民族の伝統を尊重すると声明しているので、漢字は廃止できない。そうすれば、五万個の漢字の発音を表すためにただ四十個の注音符号を、たとえいくら思いつきり援用しても何も都合が悪いことはないだろう。おまけに、この四十個の注音符号は日本のカナに学んで作られたものである」(大東亜宣言已經声明尊重各民族的传统、汉字既然不能废止、而区区的给无虑五万个汉字标音的四十个注音符号、即令毅然决然的援用、又有何不可?况且、这四十个注音符号又是学日本的假名而造成的)⁽⁸⁴⁾と力説している。漢語で創作する態度を崩さない古丁には、カナで読む漢語は、もはや漢語ではないと思われるであろう。ここで、古丁の注音符号を使うべきだという論点は、「大東亜宣言には各民族の伝統を尊重すると声明している」という基礎の上で成立する。「各民族の伝統を尊重する」とは、「大東亜共栄圏」が掲げていた美しい理念である。当時多くの日本の知識人は、それをよしとしていた。一九四三年八月の第二回大東亜文学者大会に、横光利一(一八九八—一九四七)が

「各民族の伝統を尊重しよう」と挨拶するし、前に言及した「小林秀雄を囲む」という座談会の中で、「満洲の文学がどうなるか」との質問について、小林が、「とにかく満洲の民族を非常に愛する、同情するということさえ作家にあれば、その中からきつと何かが出てくる」⁽⁸⁵⁾と言う。小林秀雄らは、「民族を愛する」「各民族伝統を尊重する」ことを正しい理想とするからこそ「大東亜共栄圏」に協力したと考えられる。古丁の「民族協和」の提唱にもその一面がある。ただし、「満洲国」で注音符号が禁止されていることから、この美しい理念は現実に実現されることが不可能だ、という事実は、古丁の目には明々白々であろう。ここに、「満人」としての古丁と日本人としての小林秀雄らの違いがある。しかし、それにしても、あえて注音符号のことを言い続ける古丁の姿勢には、その「満洲国」の文化政策に些かなりとも対抗心がうかがえる。

実は、「満語カナ」が公表される前に、『東亜カナ一覧表』⁽⁸⁶⁾「仮名反切満華語」等中華民国の注音符号に近いカナも公表されていたが、結局採用されなかった。つまり、漢字の表音問題について主に日本人が考案しており、中には「満語カナ」に反対することを含め色々な意見がある。「満人」古丁の声はその反対意見の一つにすぎず、ほとんど影響力を持たないと思われる。おまけに、古丁の文章は日本人がほとんど読まない満語雑誌『芸文志』に載っている。この文章が発表された後、「満語カナ」が公表されることになる。

2 翻訳における姿勢

①国立編訳館

古丁は早くから翻訳の必要性を訴えていた。また、チャンスがあれば、国立編訳館の設立も呼びかけた。一九三九年十二月『文藝春秋』第十七卷第二十四号に「満洲文学雑誌」を寄稿し、その中に「私は満洲の現段階に於ける文学を限定版文学と称したい」と述べ、限定版を普及版にするために、「文学に限らず、文化全般に互って斯る大出版をやろうと意気込んでいることは全く喜ばしい。しかし、これは単に民間営利事業とせず、国家的事業として、編訳館の如きものを置いて、之に当らせるのが一番望ましい」と、満洲文学を発展させるために国家事業として編訳館の設立の希望を表す。また、前にも触れた「満洲文学通信」という文章の中に、「仏典の翻訳が曾て支那文学に寄与したように、翻訳文学も満洲文学に寄与し得るであろう。(略)機会がある毎に満洲国に於て国立編訳館の如きものを置いて、一大国家的事業として日本其他外国の文化を紹介する事に就て愚見を述べて居ったが、そのこともこういう意味で言ったのであろう」、と続けて満洲文学のためにまた編訳館の設立を呼びかける。⁽⁸⁷⁾

また、「林房雄・古丁対談」の中で、

林・小説に関しては、自分たちがほしいと思う高い水準に達しなければ、国産品たりともこれを否定すると云う覚悟が必要ですよ。日本文学でも、ロシア文学でも、英文学でもよい、今満洲国の文学に対して必要な、或は満洲に居る文化人がこれをよいと思ったものを翻訳紹介するだけでもよいのです。それをやらなければだめである。

古丁・同感です。僕は機会ある毎に言っているのです。国立編訳館と云うものを作って大量的に日本を始め、世界各国の文学を紹介するのだね。⁽⁸⁸⁾

と国立編訳館の必要性を述べていた。

また、第二回大東亜文学者大会の分科会では、古丁は、「国家的常置機関たるべき『大東亜翻訳館』を大東亜中心たる東京に設置され、その分館を新京、南京、北平に設置し大東亜文学ないし文化の伝○⁽⁸⁹⁾○たらしめんことが望ましいのであります。これを可及的速かに実現せられんことを切望して止まない次第であります」と大東亜文学ないし文化交流のために編訳館の設立を提言する。この提言は採択され、大東亜編訳館の創設(翻訳委員会の設置)は第二回大東亜文学者大会の議決事項として実践的な解決を約束された。⁽⁹⁰⁾そして、実際「大東亜共栄圏」内の北平では国立編訳館が設立され、『国立華北編訳館館刊』(二九四二年十月創刊)という雑誌まで出されてい

た。「満洲国」でも、満洲芸文聯盟の中にも翻訳部門が設置され、杉村勇造がその責任者となる。このように国立編訳館の設立準備が進んでいたが、設立寸前に中止させられた。その理由ははっきり分かっているが、敗戦に向かって追いつまれている時期で予算がつかないことも考えられるし、国務院の弘報処の統制のためとも考えられる。これで、「満洲国」国立編訳館はとうとう設立されなかった。

一九四四年九月号の『新満洲』（満洲図書株式会社）に「満洲編訳館の創立」（満洲編訳館の創立）という特輯が出された。大内隆雄が「關於満洲編訳館之創立」（満洲編訳館の創立について）という文章を書き、その中で、「我々は現段階の満洲国では、民間団体の編訳館の創設が求められていると主張し、今簡素な機構として満洲編訳館を創設した」と述べる。古丁らはあきらめずに、結局国立の代わりに民間的な編訳館を設立したというのである。

② 翻訳と「民族協和」

「満洲国」では国立編訳館のような機関が望ましいと思う人がほかにもいた。『満洲国語』日本語版 第七号（一九四〇年十一月）には筒井俊一の「翻訳論」が載っている。

同文同種とはいえ語族的には全く別人である満語満文と日語日

文とが歩みよって、何か日満協和語などというものが出来るなどとはとんでもない話である。

（略）満洲文学が日系の満語小説である筈もなく、満系の日語小説である筈も亦ないのである。（略）協和とは相互理解の上ののみなりたちうるものである。日満人の結婚や日系の満人化、満系の日人化は民族協和の本旨でない。

（略）文学が民族の生命であるとすれば、他の如何なるものよりも文学と文学との接触・交流こそが何よりも先ず活発豊饒になされねばならない。その為には現在の如く家内工業的翻訳労作では多くを望めない。（略）翻訳家こそは組織化され国家的事業化されねばならぬ。⁽⁹²⁾（略）

満語と日語とは語族が全く違うから歩みよることが出来ない、「協和とは相互理解の上ののみなりたちうるものである」、そのために組織化された国家事業として翻訳を行わなければならない、と筒井は自分の意見を述べている。いわば、「民族協和」のための翻訳といえる。つまり、「民族協和」という国家政策から国家事業としての翻訳を行うべきだと言っている。

『芸文指導要綱』が公布されてから、古丁の翻訳についての訴え方が少し変わってくる。一九四一年十月に刊行された芸文志事務会編『叢書』は、古丁、小松、疑遲、爵青等の翻訳短編小説集である。

中には日本を始め、フランス、ロシア、イギリス等の作品が載せてある。「序」は「翻訳研究会」⁽⁹³⁾の中心人物大内隆雄が書いたもので、中に「世界芸文の精化を紹介することが我々の芸文創造に欠かせない重大な任務である。これについて、先日発表された『芸文指導要綱』にも明示された」(紹介世界芸文の精華、是为了充实我们艺文创造所不可缺的重大任务。关于这些、在头些日子发表的艺文指导要纲里也有所明示。)のような文章がある。そして、目次の後、本文に入る前に「須以移植我国土之日本文艺为经、原住民族固有之文艺为纬、取世界文艺之粹、而造成浑然独特之文艺为目标。——『芸文指導要綱』——」(此の国土に移植されたる日本文艺を経とし、原住諸民族固有の芸文を緯とし、世界芸文の粹を取り入れ織り成したる渾然独自の芸文たるべきものとす)という『芸文指導要綱』の内容を引用し、特に「取世界文艺之粹」を太字にしている。古丁らはいかに『芸文指導要綱』に従って翻訳しているかを示しているように見える。『芸文指導要綱』については、「林房雄・古丁対談」の中で、古丁は「その理念は非常に結構なものだと思っているが、やり方として日系方面のものを主にやるという事は考え物である」と発言している。⁽⁹⁴⁾古丁のこの一言は、スローガンや理念を高く美しく謳い、実際にはスローガンや理念と違うやり方で行う、という「満洲国」の政策の本質を暴露したと言える。

一九四二年以後、「満洲国」は満人に聖戦完遂のために勤労奉公

せよと要求する。そのため、「民族協和」というスローガンはもっと高く掲げられるようになる。前に触れた解半知の「第一建国より第二建国へ」という文章もこのような社会背景の中で書かれたものである。

一九四三年「駱駝文芸叢書」の一冊として芸文書房から大内隆雄の漢語エッセイ集『文芸談叢』が出版された。これを契機に、古丁は「用漢文写」⁽⁹⁵⁾という短文を書いた。文章は大内隆雄の地道な翻訳活動を評価しながら、「日本人は漢文で書く歴史が長いが、漢文の白話で書くのが、私の寡聞の限りそれほど多く見られない。大内氏のこの文集は一つの始まりとなるかもしれない」(日本人用汉文写、有很悠久的历史、而日本人用汉文的白话文写、在我的寡闻里、却不多见、也许大内隆雄氏此集竟是一个开端)と述べ、「文人の魂と魂の交流は、先ず筆と筆の交流だ。相手の言語で書くことは、相手の言語を翻訳することと同じく有意義だ」(文人的魂和魂的交流、须先有笔和笔的交流。彼此用对方的语言文字来写和彼此用自己的语言文字来译、都同样是有意义的工作)という意見を述べ、日本人知識人と魂の交流を望んで、そのために、自国のことばでの翻訳と相手のことばでの執筆が同じように重要だと言っている。

前に言及したが、満洲国語研究会の目的の一つは「国語」の普及である、と規定されている。その普及は、主に満系に日語を教えることであるが、基本的に日系も「満語」を習う必要がある。また、

一九四三年八月に發布された「協和会運動基本綱領」にも、日系の課題として「満語」の習得を掲げている。このような政策背景の中で、大内隆雄のこのエッセイ集は、まさに日系の「満語」学習の模範となり、それを賞賛する古丁は、協和政策に則っていることになる。「満洲国」の中では相手の言語を学ぶことは、すなわち相手の民族を尊重することである。ここでも、前の注音符号のと同じように、古丁の些かな反抗が見え、漢語と漢語文化を守る姿勢が見える。

このように、古丁は翻訳と国立編訳館設立を一貫して主張してきたが、「満洲国」の政策の変化にともないその目的が少しずつ変化している。満洲文学の質の向上から、『芸文指導要綱』にそって、そして「民族協和」へと次第に変わる。支配されている「満人」として、古丁は、その翻訳の理想を実現させるために「満洲国」の文化政策に追随し、それに乗る。解半知が「自信があり理由がたつものなら、何故主張せぬのか？ 人家面前は聴かないと云う前に、主張する熱意のない傍観的な不協力態度を反省しよう」と「満人」に言っていたが、古丁は注音符号についても国立編訳館についてもはつきり主張してきた。

三 結 論

古丁は長春の町で満鉄の公学堂と中学堂の教育を受け、日本文学や文化への親しみが培われた。一九三二年九月の満洲事変により、古丁は北平に亡命する。そして、一九三二年新たに北京大学に入学して、一九三三年中国左翼作家聯盟北方部に入り、組織部長に選ばれる。そして、日本プロレタリア文学作品、朴能著小説「味方——民族主義を蹴る——」、岩藤雪夫著小説「紙幣乾燥室の女工」と、古川莊一郎著論文「芸術理論に於けるレーニン主義のための闘争——忽卒な覚え書——」を翻訳した。

この時の古丁は、当時の中国共産党指導下の無産階級革命現実の必要に応じてテキストを選び、その基準としては、日本文学を紹介することより、現実の中国革命に役立つかどうかが優先していると思われる。それゆえ文戦派岩藤雪夫の小説を翻訳しながら戦旗派の蔵原惟人の論文も翻訳する。この時、古丁は「味方——民族主義を蹴る——」を翻訳して無産者階級の国際連帯を訴え、「紙幣乾燥室の女工」の翻訳を通して中国女工の闘いを応援する。また、「芸術理論に於けるレーニン主義のための闘争——忽卒な覚え書——」の紹介により中国の左翼文学理論建設のために尽力する。

この時期の翻訳の方法は、初心者がよく行うような直訳であるが、中には中国の現実にあわせるために中国風にアレンジしたり原文の

内容を増やしたり減らしたりすることもあった。これらの作品の翻訳から、古丁は左翼革命に燃えているが、弾圧に備える構えができていない。そのためか、彼は逮捕されたらすぐに変節してしまった。

「満洲国」では、古丁は数多くの日本語作品を翻訳した。そのテキストの傾向からその翻訳は三つの段階に分けることが出来る。すなわち、第一、現実への抵抗の態度が窺えるものを翻訳する段階（一九三七年）。この時期彼は「魯迅著書解題」と石川啄木著「悲しき玩具」を翻訳した。北平から帰って間もない古丁は、逮捕によって負ってしまった心の傷と「満洲国」の抑圧された社会環境のため、不自由を感じ、苦悶する。彼は絶望に瀕し、一生懸命に希望を見出そうとする。そのような心情の表れとして、この段階の翻訳のキーワードは「希望」であり、彼はそれを以て自分自身と満洲の文学青年を励ます。

この時期の翻訳も基本的に直訳である。しかし、左翼や反日と思わせる単語や文章を削除したり書き替えたりする。それは「満洲国」の厳しい取り締まり政策に対応しながら、魯迅を満洲の読者に紹介するための戦略でもあった。

第二段階（一九三八年～一九四一年）は、いわゆる文学作品の翻訳を主とする。主に夏目漱石著『心』と武者小路実篤著「井原西鶴」を中心にその特徴を検討した。この時期の古丁は、小説創作に精力を打ち込んでいるため、翻訳も小説の技巧を学ぶために行ったと思

われる。『心』の翻訳から心理描写を学び、「井原西鶴」から伝記の書き方を習う。

作者への忠実さを徹底させた『心』の直訳には、漢語に日本語文法と語彙を取り入れる実験が見られ、明清時代の白話小説からの口語の借用も目立つ。しかし、「井原西鶴」の翻訳は読者の立場に立ち、「註」をつける等読者により理解してもらうための工夫が見られる。『心』から「井原西鶴」まで、古丁の文学的立場は作者・翻訳者中心から読者中心へと変わり始めていると見られる。

第三段階（一九四二年～一九四五年）で大川周明著『米英東亜侵略史』、高村光太郎著『殲滅せんのみ』、吉川英治著「宮本武蔵」を翻訳した。これらのテキストは、左翼傾向的なものでもなければ、純文学的なものでもない。表面的にみれば、いずれも時局的なもので、いわゆる「大東亜戦争」に協力するものとなる。これらのものの翻訳から、「満人」文芸家代表、満系出版社芸文書房の社長として、古丁は確かに「鬼畜米英」との戦争の潮流に乗り「民族協和」宣伝の国策の先頭に立っていた、ということが言える。また、『米英東亜侵略史』の翻訳から、「大東亜戦争」に複雑な心境を抱えながら時流に乗っている古丁像が浮かびあがる。「殲滅せんのみ」の翻訳には、『芸文志』を継続させるために苦心する古丁も見える。「宮本武蔵」の翻訳のうち、雑誌掲載分には、古丁の作品の一貫した「満人」の性格と民度に対する批判が読み取れる。

古丁の翻訳活動を「満洲国」言語問題の中において見ると、一九三八年から「満洲国」政府は学校の中で国語としての日本語教育を強化するとともに、「満語」を日本語と何らかの関係付けをしようとする。それで、中華民国で使われている注音符号が禁止され、日本語のカナで漢字の発音を表す「満語カナ」が公布される。それに対して古丁は、「満人」作家は漢語で創作しなければならない、しかし、漢語の中には欠陥があるから、翻訳を通して新しい語彙と語脈を取り入れる必要がある、新しい語彙を作る場合にも、注音符号が必要である、また、表音の役割において、注音符号は日本語のカナよりすぐれている。「大東亜宣言」には各民族の伝統を尊重すると声明している」ので、漢字が廃止されない限り、注音符号は使われるべきであると主張しつづけていた。これほど注音符号にこだわる古丁には、日本語普及の強い勢いの中で漢語と漢語文化を守る姿勢がうかがえる。

「満洲国」時代、古丁の日本文学と文化への理解は、一部の日本の文化人の考え方への共感を生み、彼等といっしょに文学や文化事業を行うようになった。「各民族の伝統を尊重する」という理念をよしとするから「大東亜共栄圏」に協力する一部の日本の文化人と同じように、古丁は「各民族平等」「魂と魂の交流」という真の「民族協和」を望む。しかし、「満洲国」で美しい理念と現実のやり方との間のギャップをはっきり見ている古丁は、その美しい理念の

実現の不可能性を知っている。これは、彼と、ふだん「内地」に閉じこもり、その理念の実現の方法に詳しくない日本文化人との違いである。これは宗主国の文化人と植民地の文化人との違いでもある。

注

(1) 「満洲国」では中国東北地方に住んでいて中国籍を持つ人は民族を問わずに「満人」と呼ばれる。そして、中国語(漢語)は「満語」と呼ばれる。ゆえに、「満人」にはエスニックの満洲民族の人が含まれているが、漢族等の民族も含まれている。「満語」も満洲族の言語ではない。これらは日本人が「満洲国」を中華民国から切り離そうとするための政治性が込められた呼称である。

(2) 岡田英樹「日本語と中国語が交差するところ——『満洲国』における翻訳の実態」『満洲国の文化——中国東北のひとつの時代』、西原和海・川俣優編、せらび書房、二〇〇五年三月二十五日、七二—九〇頁

(3) その研究の目的は論文「古丁と大東亜戦争——大東亜文学者大会と三つの作品をめぐる」(国際日本文化研究センター『日本研究』第三十二集、角川学芸出版、二〇〇六年三月 一一九—一四八頁)の中で説明したので、ここでは省略する。

(4) これについて鉄峰の論文「古丁的政治立場と文学功績」(『北方論叢』一九九三年第五期 哈爾濱師範大学北方論叢編輯部)を参照した。また、私は古丁の妹徐青氏に電話インタビューし、古丁が東北大学に一年間在学していたという証言を得た。東北大学は満洲事

変後、北平に引越したことから古丁の一九三〇年秋の東北大学への入学が確実となる。

- (5) 「(一九三三年六月) 左聯常委改組。新参加の徐突微が組織部の責任を持つ(組織部長となる)」(陸万美「憶戦闘的『北平左聯』和『北平文総』」「北方左翼文化運動資料汇编」中共北京市委党史研究室等編、一九九一年六月、北京出版社、三五二頁)

- (6) 本論文の引用などについて、日本語は新字新仮名、中国語は簡体字とする。

- (7) 朴能「味方——民族主義を蹴る——」『プロレタリア文学』一九三二年九月号、七四—七五頁

- (8) 前掲、朴能「味方——民族主義を蹴る——」七五頁

- (9) 『文学雑誌』第二号、一九三三年五月、一三五頁

- (10) 「発表年月日と掲載文献」『日本プロレタリア文学集・十』文芸戦線作家集・(一)『新日本出版社、一九八五年十一月、四〇一頁

- (11) 原文 岩藤雪夫「紙幣乾燥室の女工」『改造』、一九三二年、五月。①八九頁②③九五頁④八九頁⑤一〇四頁⑥一〇二頁⑦⑧八九頁⑨一〇三頁

- 訳文 『文学雑誌』第三・四合併号、一九三三年七月。①一五五頁②③一六一頁④一五四頁⑤一六八頁⑥一六七頁⑦⑧一五五頁⑨一六八頁

- (12) 「办横死小林遺族募捐启」『文学雑誌』第二号、西北書局、一九三三年五月、一二五頁

- (13) 上海『中華日報・十日文学』第五号

- (14) 原文 古川莊一郎「芸術理論に於けるレーニン主義のための闘

争——忽卒な覚え書——」『ナップ』、一九三一年十一月号。①一〇頁②一頁③一二頁④一三頁⑤一四頁

- 訳文 「在艺术理论中的列宁主义的斗争」『水流』第二卷一期、北平水流社、一九三三年七月。①二三頁②二四—二五頁③二六頁④二七頁⑤二九

- (15) 古丁の就職は難しくて、たくさんの人に頼んだ。結局、公学堂時代の先生のコネで国務院に就職するようになった——これは古丁の妹徐青氏の証言である。五歳偽り云々は、疑遲(李青訳)「雑誌『明明』の回想」(『文学・社会へ』三一書房、一九九六年九月)によるものである。

- (16) 満人官吏日本留学の件 陸軍省——関東軍参謀長 西尾壽造 昭和九年九月二十五日

アジア歴史資料データベース <http://www.jacar.go.jp/DAS/meta/listPhoto>

- (17) 疑遲の回想によれば、芸術研究会の最初のメンバーは古丁、外文、疑遲三人で、後辛嘉が加わって四人となった。(前掲、疑遲・李青訳「雑誌『明明』の回想」四三四頁)

- (18) 前掲、疑遲(李青訳)「雑誌『明明』の回想」四三二頁

- (19) 古丁「奮飛・自序」、月刊満洲社、一九三八年五月

- (20) 本文表参照。

- (21) 『芸文指導要綱』(一九四一年三月公布)

- (22) 東方国民文庫は満日文化協会から出版されたもので、日語部と満語部がある。同じ本のそれぞれ日語版と満語版が刊行されることもある。例、藤山一雄著『新満州風土記』、武藤富雄著『発明と自

由恋愛』。

- (23) 黒竜江民報事件…一九三六年六月十日関東軍が『北満共産党全面逮捕の命令』を出して、『黒竜江民報』の社長の王甄海とその文芸欄の編輯者金劍嘯がそれぞれチチハルと哈爾濱で逮捕され、七月他の二十九名と軍事法廷で裁判される。そのうち、王、金ら五人が死刑を執行される。口琴社事件…一九三七年四月、『哈爾濱口琴社』のメンバー侯小古等が『瀋陽の月』等抗日の歌を歌ったため、十八日哈爾濱警察庁特務科に逮捕され、九月に刑死した事件。

- (24) 「評『紅樓夢別本』」「二知半解抄」、月刊満洲社、一九三八年、一一―二四頁

- (25) 陶明濬『紅樓夢別本』『大北新報』連載、単行本出版年月、出版社不詳。受賞のことは一九三六年十二月十五日『盛京時報』に発表。

- (26) 『奮飛・自序』、月刊満洲社、一九三八年五月

- (27) 前掲『奮飛・自序』

- (28) 原文 『大魯迅全集』第四巻、改造社、一九三七年。①四九六頁②③四九七頁④四九七―四九八頁⑤四九八頁⑥五〇〇頁

- (29) 古丁「大作家隨話」「二知半解集」、月刊満洲社、一九三八年、三八頁

- (30) 于耀明『周作人と日本近代文学』、翰林書房、二〇〇一年十一月、五三―六〇頁

- (31) 古丁訳「悲哀的玩具」『明明』第二巻第三期「日本文学紹介特輯」一九三七年十二月、七頁

- (32) 前掲、疑遲（李青訳）「雑誌『明明』の回想」、四三四頁

- (33) ほかに「偶感偶記並余談」（「二知半解集」、月刊満洲社、一九三八年）に「由他去罢」、「心」訳後小記に「也由他去罢」等がある。
- (34) 古丁「墨書」『浮沈』、満日文化協会・詩歌叢刊刊行会、一九三九年十二月、九一頁

- (35) 辛嘉（大内隆雄訳）「古丁に就いて」『満洲浪漫』第三巻、満洲文祥堂、一九三九年／呂元明・鈴木貞美・劉建輝監修（『満洲浪漫』第三巻）、ゆまに書房、復刻版、一九九頁

- (36) 古丁訳、ゴーグリ著「狂人日記・後記」『明明』第二巻第四期、月刊満洲社、一九三八年一月 三三頁

- (37) 「訳叢」、芸文志事務会編、芸文書房、一九四一年十月、五四頁

- (38) 文協は満日文化協会のことで、杉村さんは杉村勇造のことである。杉村は一九二四年から三年間北平に留学し、金石学と書誌学を学ぶ。一九三二年満洲に渡り、満洲国立博物館、満洲国立図書館などの設立に携わる。一九三三年から満日文化協会の設立に従事。その後、満洲の文化事業に尽力。戦後、中国書・画・陶磁器等芸術に関する著書が数多くある。

- (39) 疑遲がその回想録にこう述べる。月刊満洲社社長城島舟礼（一八九二―一九四四）は、自己宣伝が好きであるが、ケチである。「城島文庫」が出版された時、名前は貸してくれたが、実は金は一文も出していない。（前掲、疑遲著・李青訳「雑誌『明明』の回想」、四四三頁）

- (40) 夏目漱石著古丁訳「心」訳後小記、満日文化協会、一九三九年十月、二六四頁

- (41) 古丁「消閑雑誌」『文選』第一輯、王秋蛩編、文溯書局、一九

三十九年十二月

- (42) 辛嘉「關於古丁」陳因編『滿洲作家論集』実業印書館、一九四三年六月、一〇三—一〇九頁
- (43) 短編集『奮飛』（月刊滿洲社、一九三八年五月）に収録された作品はほとんどそうである。
- (44) 古丁訳『心』、満日文化協会、一九三九年十月、二六五頁
- (45) 『譚 談四 友情・小松』、芸文書房、一九四二年十一月、五六—五七頁
- (46) 夏目漱石『こゝろ』、一九一四年九月、岩波書店、夏目漱石『こゝろ』漱石文学館名著復刻、日本近代文学館、一九七六年六月。
 - ①二九七頁②二一五頁③三二九頁④二一七頁⑤三二三頁⑥三四七頁⑦三四一頁⑧二一六頁
- (47) 『心』古丁訳、満日文化協会、一九三九年十月。①一八〇頁②一三六頁③一九七頁④一三七頁⑤一八九頁⑥二〇七頁⑦二〇三頁⑧一三六頁
- (48) 『心』周炎輝訳、瀋江出版社、一九八三年十月。①一八三頁②一三四頁③二〇二頁④一三五頁⑤一九二頁⑥二二二頁⑦二〇八—二〇九頁⑧一三四頁
- (49) 『心』周大勇訳、上海訳文出版社、一九八三年一月。①一八三頁②一三五頁③二〇一—二〇二頁④一三六—一三七頁⑤一九三頁⑥二二二頁⑦二〇八頁⑧一三六頁
- (50) 前掲、古丁訳『心』①②一三五頁③一六六頁④一六七頁⑤一七〇頁⑥一七一頁⑦一七四頁
- (51) 古丁「話の話」『滿洲国語』日本語版第五号、滿洲国語研究会

一九四〇年九月、二三頁

- (52) 前掲、辛嘉「古丁に就いて」、一二〇頁
- (53) 前掲、古丁「話の話」、二〇頁
- (54) 「翻訳にかんする通信・返信」『二心集・南腔北調集』『魯迅全集』第六卷、竹内実・吉田富夫訳、一九八五年四月二十五日、二一〇—二一八頁
- (55) 前掲、古丁「消閑雜記」、一二二頁
- (56) 『麒麟』創刊一周年記念号、滿洲雜誌社、一九四二年六月
- (57) 紅野敏郎「解説」『武者小路実篤全集』第十卷、小学館、一九八九年六月、六六七頁
- (58) 古丁「小記」『井原西鶴』『芸文志』第三輯、一九四〇年六月、三九頁
- (59) 「建国を語る」『芸文』三月号、芸文社、一九四二年三月、一七八—二〇〇頁
- (60) 鈴木貞美 解説「臨時増刊『大東亜戦争号』」『芸文』第二卷、呂元明／鈴木貞美／劉建輝監修、株式会社ゆまに書房、二〇〇七年七月、六頁
- (61) 山田清三郎『転向記（第二部）・嵐の時代』、理論社、一九五七年九月、一一五頁
- (62) 大川周明『米英東亜侵略史』、第一書房、一九四二年一月、一五八—一六〇頁
- (63) 「林房雄・古丁対談」『芸文』四月号、芸文社、一九四二年四月、一四六—一五六頁
- (64) 前掲「林房雄・古丁対談」一四六頁、一五五頁

- (65) 前掲「林房雄・古丁対談」一四六頁
- (66) 解半知「第一建国より第二建国へ」『芸文』三月号、芸文社、一九四二年三月。
- (67) 『高村光太郎全集』第三卷、筑摩書房、一九五八年二月、四七八頁
- (68) 二〇〇七年八月、筆者が杜白雨をインタビューした時、終戦直前の古丁の「協力」問題について質問し、杜がそのように答えた。
- (69) 古丁「偶感偶記併余談」『二知半解集』、月刊満洲社、一九三八年、六七—六八頁
- (70) 「誌上聚談」『青年文化』一卷二期、満洲青少年文化社、一九四三年九月、四一—四三頁
- (71) 吉川英治「宮本武蔵・一」、『吉川英治全集』十五、講談社、一九八〇年二月、一三二頁
- (72) 梅定娥「古丁と『大東亜戦争』」『日本研究』第三十二集、二〇〇六年三月、一一九—一四八頁参照。
- (73) 前掲、岡田英樹「日本語と中国語が交差するところ——『満洲国』における翻訳の実態」、七二—九〇頁
- (74) 于逢春「『満洲国』の蒙古族に対する日本語教育に関する考察」『広島大学大学院教育学研究科紀要』、二〇〇二年二月、二〇〇頁
- (75) 安田敏朗『帝国日本の言語編制』、世織書房、一九九七年十二月、二五七—二五九頁
- (76) 史立文「方塊改革談」『満洲国語』満語版、第三号、一九四〇年八月、一一頁
- (77) 古丁「話の話」『満洲国語』第五号、一九四〇年九月、二〇頁
- (78) 古丁「満洲文学通信」『文学界』第七卷第四号、一九四〇年四月、一七一頁
- (79) 前掲、古丁「話の話」、二二頁
- (80) 前掲「林房雄・古丁対談」、六四頁
- (81) 浅見淵「文学と大陸」、図書研究社、一九四二年四月、二〇頁
- (82) 史之子（古丁）「注音符号のこと」『月刊満洲』第十一卷第八号、月刊満洲社、一九三八年八月、一六一—一六二頁
- (83) 前掲、史之子（古丁）「注音符号のこと」、一六二頁
- (84) 丁（古丁）「思無邪」『芸文志』第五号、一九四四年二月、引用順で六頁、六頁、七頁
- (85) 「小林秀雄を囲む」『芸文』第二卷第八号、満洲芸文聯盟、一九四三年八月、七二頁
- (86) 前掲、安田敏朗『帝国日本の言語編制』、二五五頁
- (87) 古丁「満洲文学雑誌」『文藝春秋』第十七卷第二十四号、一一〇頁、一七一頁
- (88) 「林房雄・古丁対談」『芸文』一九四二年四月号、芸文社、一五三頁
- (89) 読み取れない文字。
- (90) 古丁（大内隆雄訳）「第三分科会 翻訳委員会の設置」『文学報国』、第三号八面、一九四三年九月十日
- (91) 山田清三郎「実践議決事項について」『満洲公論』第二卷第十号、満洲公論社、一九四三年十一月
- (92) 筒井俊一「翻訳論」『満洲国語』日語版第七号、一九四〇年十一月、一六一—一七頁

(93) 「翻訳研究会」の活動は大内隆雄を中心に行われ、古丁等がそのメンバーであるというくらいは分かっているが、それ以上の詳細は不明。

(94) 前掲「林房雄・古丁対談」、一五〇頁

(95) 『芸文志』第五号、芸文書房、一九四四年二月、一〇―一一頁

(96) 前掲、解半知「第一建国より第二建国へ」